



都市は冒険に
満ちている。

interview 石塚元太良「東京を撮る視点」
寄稿:「東京は人が住むところ也」
「ニートニク宣言」ほか

Freegan / 古くて新しい江戸の社会
ハンモックで楽しむ都市ライフ
“セガレ”というプラットフォーム
自転車で働く / 東京野草
Monoflow



現在世界では、オイル価格の上昇、地球温暖化、人口爆発、食料危機などが起き、それに伴い経済の潮目も変わったといわれています。これらは産業革命以降、経済を拡大し消費することが発展の原動力とされるなか、エネルギーを無限に使ってきたことの帰結です。消費エネルギーを抑え、文化のエネルギーと創造の力で世界を変え、人々の生活を考える、本当の人類の英知が必要な時期が来たといえます。

TOKYO DESIGN FLOWはこのような問題意識のもと、都市の状況や人々のライフスタイルそのものをデザインの対象としてとらえ、それらの全てのデザインを覆う傘となり、大きな流れを創り出すことを目指します。

TOKYO DESIGN FLOWは一つの事象を表すものではありません。

東京を中心にデザインを取り巻く状況を、マンスリーイベント「LAST THURSDAY」、ウェブサイト、紙媒体などを通し情報を発信していきます。

Design & philosophy



RECESSION DESIGN-- 都市には冒険が満ちている。

いつの時代からかデザインする事が冒険でなくなった。

新しいデザインはいつも実験と冒険と共にあった。

デザイナーが危険を冒さず、デザインがよく売れる、安全なお金儲けになってしまった。

そこで大不況。

実は安全を保障するはずの保険会社が破綻し、

安定なはずの銀行が破綻し、巨大企業が崩れる。

都市はまるで密林のなかのように危険に満ちている。

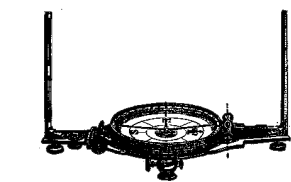
現代では冒険は都市のなかに在るのかもしれない。

勇気を持った行動は美しいデザインに良く合う。

不況といはれる今こそ冒険は都市にある。

きれいな花には毒もある。

危険のそばには真実がかくれている。



Adventure is in the city today.

There are dangerous things in the urban life.

Full of risks in urban life.

There comes poison spiders in town, besides beautiful flowers.

And there is the truth in life next to the risks.

おつかれっすー！YES PEACE!!! 最近どんな感じ？忙しい？でも、忙しいことはいいことじゃん。うん。そうそう。僕らは相変わらずだよ。ウェブTVもそうだし、Last Thursdayもね。あと、月一で出しているペーパーもあってさー。知ってる？かなり内容也多岐にわたって面白いと思うから、ぜひ読んでみてよ。今月号は「都市の冒険」がテーマなんだ。今の時代、都市にこそ冒険するチャンスがあふれているんじゃないか、視点を少し変えるだけで街を楽しむことができるんじゃないか、って感じでね。まあ、そんな話はさておき、今週末どう？僕とアドベンチャーしちゃう？

.....え!? あ、はい、ゴメンナサイ。もう、電話しません。



MAT.





冒険は、いま都市に。

現在、僕たちが住む東京のなかでは、いろいろな地域で社会の地殻変動が起きつつあります。食べ物、農業、自転車、グリーンジョブズと言われる働き方。環境のため、それにお金を得るため、いろいろな働き方と社会への参加の仕方が出てきました。そんな僕たちが生きる現代の都市に理想郷（ユートピア）を見るとしたら、それはどんな都市の姿なのでしょう。様々な文化や価値観が渾然と循環する場所。そして人間的な繋がりがあある場所。僕たちはそれを、理想的な都市の姿= "Urban Utopia"と呼びます。そして"Urban Utopia"はすでにあるものではなく、僕たちが求め、創造していくものだと思います。都市にはさまざまな危険があります。大不況、そして言い知れない不安が都市を漂っていますが、そこに生きる人々が「私はこれがいい」と自分の満足・充実を見つけ、人間らしく暮らすことができれば気持ち次第でどこでもユートピアが見つけれられるはずです。いま都市で生きることは、そうした"Urban Utopia"を探す冒険と言えるのかもしれない。その冒険は時には緩く、時にはサバイバル。そして何を満足の基準にしているかが重要。音楽やスポーツ、アート、デザインなどのカルチャー。農的生活、自転車生活などグリーンな価値観。いま都市に垣間見える価値の転換を遊び心を持って冒険する。こんな時代だからこそ遊んだもの勝ち。思いっきり遊ぶ。今回は"Urban Utopia"を冒険するヒト、モノ、コトを伝えます。冒険は、いま都市に。

都市のユートピア

text：黒崎輝男



1516年にイギリスでトマス・モアがUTOPIAという新しい言葉（ギリシャ語のNoとPlaceを合わせた言葉からできてるらしいが）の題の小説を書いた。どこにもない理想郷と位置付けられているようだがちょっとちがう。思想と理念と社会のシステムがそこに込められている。科学技術や社会システム、自由も在るが奴隷もいるようだ、孤立した島で他の社会から離れている。仏教のニルバーナ（涅槃）やイスラム教でも同じようにそれぞれの理想の国がある。プラトンの国家というのが初めかもしれないし、マルコポーロの東方見聞録のなかのジバングという国も遠くに在ってまだ行けないすばらしい国として描かれている。中世のヨーロッパでは日本が理想の国だったらしいが、実は其れを考えるためにベネチアにモデルを求めたという説もある。それに対してデストピアといはれる最悪の

場所を描くことも人類は色々とやってきたようだ。生活のため、安全な収入の確保と現実的なことだけ考えている今の日本社会にとっては少し考えるべきだ。ボクも最近ひょっとしてユートピアは身近などこに在るのではと思ってきた。安全ではない都市の中に。都市では、不安や危険を避けるべくありとあらゆる安全策が考えられてきた。全て確実なものがないとしたら其れは僕らの姿勢や、考え方のなかにあるのではないか。遠くから見ると日本は理想郷になり得るところなんだから、と思ってあまり心配ばかりしないで、思い切って新しい価値観にもとづくいろいろな事業を立ち上げて行く人たちが出てくるだろうと思う。心のなかにユートピアをイメージできる人が此れからは活躍するだろう。

石塚元太良インタビュー

東京を撮る視点

interview & text: 堀江大祐 (Media Surf Communications Inc.)

世界中を旅し、撮影し続けている写真家・石塚元太良氏が、カヤックで東京の川を漂いながら撮影し、東京の姿をはじめて作品に仕上げた『INNER PASSAGE』。そこに映し出されているのは見慣れていたはずなのに、見たことがない東京の姿であった。それは視点を変えることによって生まれた発見であり、東京という都市にも情報化されていない、視点において手つかずの風景があることを教えてくれる。石塚氏が目の間に広がる世界を、そして東京という都市を、どう見つめているのか。それが知りたくてインタビューに行ってきた。

『INNER PASSAGE』を撮るキッカケって何だったんですか？

もともとカヤックに乗ってアラスカの氷河を撮影していて、カヤックってパドルするための筋力がかなり必要だし、行くたびに

自分の技量に不甲斐ないなと思っていて、「もっと練習しなきゃな」って。そんななかで、当時僕は護国寺に住んでいて、近くに江戸川橋があって、神田川が流れているんですけど、ある日駅に向かって歩いている時に、ふと「ここで練習できるじゃん」って思ったんです。

その時単純に思いつきで、非常階段で川に降りていって、「降りて下から見たら、どうなんだろう」って思いながら。そう思ってしまったら僕はカメラマンだから行くしかない。もしかすると毎日僕と同じ道を歩いている人でも「水面がきれいだな」とか「魚がいるな」くらいは思うかもしれないけど、意識のなかに「じゃあ非常階段降りていこう」とまで思う発想はないんじゃないかな、と思います。僕が川でカヤックに乗っているときも、誰もそこにカヤックがいるなんて思わないから、ほとんど気付かれなくて、気付くと、あれは本当に不思議な光景なんだけど携帯のカメラで撮り始めるんですよ。そんなのも面白かったですね。



初めて降りてみたときの感覚ってどんなものだったんでしょう。

実際に降りてみたら、視線が無限の方向に伸びていって、すごくワイルドな感じがして。流れはそんなじゃないけど、川が上流から下流に向かって進んでいくっていうのが、都市のなかに隠された物語のように思えたんです。あの川は上が高速道路で、まるで閉鎖されているようになっていて、川なんだけど、川とは呼べないような、僕はそれを「INNER PASSAGE」と呼んで。

それに、いつも首都高は混んでいて麻痺しているけど、その下で自分がカヤックで一人水の中にいる、なんとも言えない感覚があって「これで作品が成立する」と思ったんです。それまで東京を撮りたいなってずっと思っていたけど、なんとなくまとまらなかったのに、汚れていたとしても自然の息吹みたいなのがあって、風が風いなり、川沿いに桜が咲いていたり、そういったことが東京を捉えた一つの作品として成り立って。

それに表紙になった御茶ノ水の聖橋は

有名な橋だけど、カヤックに乗って下から見るとこんなふうなんだよっていう、言葉が要らないというか、ビジュアルが持つ本来的な意味、日常の中で知っているはずの景色も視点を変えれば全く違うものに見えるっていうのが面白かったんです。

普通では行かないような、行ったら怒られてしまうような場所に立つ高揚感って、子供の頃にあった感覚のような気がします。

そうなんです。一度、目黒川でファッ



ションの撮影をしたときに、目黒川はあんまり潜んでないから『INNER PASSAGE』的には違うんだけど、非常階段が降りやすいんです。それでスタッフ7人くらいで降りてみたんだけど、すぐ子どものころのことや感覚を思い出して、ついでに近所のおばさんに怒られたりもして(笑)。妙に懐かしさがあるって、どうして大人になるにつれて、行っちゃいけないって言われているところとか、そういうところを意識のなかで遮断してしまって冒険しなくなってしまうのかなって。やっぱり社会に取り込まれて、社会の価値観に自分をすりあわせようとして失っていったんだろうなって思いました。それに大人になってからの遊びって、かくれんぼとかどろけいとか必死になって遊ぶなかにあったものがないですね。是非一度非常階段降りていただければと。

アラスカから東京。場所としては真逆の場所のように思えますが石塚さんのなかでは、その点でどういうふうに感じていますか？

カヤックのエクササイズの一環として始めたことだったけど、その前にあった僕のなかのどうしても氷河が撮りたいっていう想いがあるって、世の中で氷河が一番美しいと思っていて、そしてそれを何年ものかかるだろうけど、自分の作品のなかに落しこんでいきたいという大きな目標があって、そんななかで僕があの時、非常階段を降りていったことで新たな作品に繋がって。その結果、アラスカの自然の大ききみたいなものを都市に持ち込めたと思っています。アラスカのパイプラインを撮ったときは大自然のなかにある、どうしようもない人工物。『INNER PASSAGE』では都市にあるどうしようもない自然の存在感というか、そうした対比関係みたいなものがいつの間にか成立していることが面白いなって。

東京をずっと撮りたいと思っていたとき話にありましたが、石塚さんにとっての“東京”ってどんなところですか。

20代のときはほとんど海外旅行ばかりしていて、いろんなところに行って、帰ってくると、「東京ってなんて変なところなんだろう」っていつも思っていて、けど数週間すると、いつのまにか馴染んじやっているんです。それってなんでだろうって考えると仕事のサイクルのなかに戻って、次はあれしなきゃ、これしなきゃって考えると東京ってすごく便利にできていて、他の都市に行くと、海外ということを忘れて考えても、なんでこんなに不便なんだろうって思うことが多いですね。東京って、やっぱりすごい利便性というのが一つの存在意義っていうような。そこで生きていくなかでどんどん馴染んでいって、その特異さみたいなものをいつのまにか忘れてしまうから、絶対に東京に帰ったら、すぐにカメラを持って、い

ろいろ撮影してみたりするけど、いつも「なんか違うな」って思っていました。

東京で生きるっていうことは、箱みたいなところに住んで、働いて、水平と垂直のなかで、コンピュータ的に処理されてる感じがします。ポートランドやバンクーバーだったらもう少し共生しているような、人間自身も自然なんだっていうような意識ができるようなものがあるような気がするのですが。僕は2年前から鎌倉に移って、すごい写真も変わったし、すごいクリアに見えるようになったっていうか、自分のものの見え方だけじゃなくて、自分のやりたいこともクリアになったし、やっぱり東京はヒトが多すぎて、なんでも相対的で、その相対性のなかで常に選択を強いられているような気がします。それこそ、どんなものであれ、なにかしら強いモチベーションがないと生きていけないんじゃないかと。

それでは石塚さんのモチベーションとは？

僕は勝手に写真を撮っている人間だし、学校も行っていないし、師匠もいないので、自分がやり始めたことは誰に何を言われてもやめないし、カヤックで川を下って誰かに注意されてもやめる筋合いがないんです。個人の視点から面白いと思えることに對して、社会の側から反響があったら、僕はそれで自分がやってることに幸せみたいなものを見出せます。氷河も本当にそれで、別に温暖化しているから撮りたいわけじゃなくて、自分で目の前に対峙して、すごいと思って撮り始めているから、ずっとそれを続けられているというか。それに現代アートの世界では作家がワインのラベルのようになっていて、僕はそういうものがまったく興味がなくて、自分が納得しないと終わらない。意地というか、やせ我慢

というか、ガマン比べですね。自分はすごい特殊な生き方してるって思うけど、でも自分はこうだからいいんだよっていうペースでいられるんじゃないかと思います。

それにいま東京という近いところで撮りながら、アラスカというすごい遠いところでも撮っていて、写真を中心に考えながら、いろいろやりたいことがあって、一つの場所にはずっといられないし、一つのことばかりをやっているといけない。そのバランスって実はすごく都会的だなんて思っているんです。忙しくて、撮り散らかっているかもしれないけど、いろんなことに興味を持てることで、見えるものも変わってくるし、バランスが取れるような気が僕はしています。



Gentaro Ishizuka
1977年生まれ。大学中退後、世界を放浪。アフリカ縦断、アジア横断の後に編んだ「worldwidewonderful」で2000年エブソンカラーイメージングコンテストグランプリ受賞。世界を2周しながら撮影した「worldwidewarp」で2003年、ビジュアルアーツフォトアワード大賞受賞。2004年度、日本写真家協会新人賞。写真集に『WWWWW』(青幻舎)、『PIPELINE-ALASKA』(アチグラパブリッシング)など。2008年最新作『INNER PASSAGE』(エスプレ)を発表。

東京は人が住むところ也

冒険とは未知への挑戦、都市にはその対象がいくらでも眠っている。

text：伊藤洋志(ナリワイ)



わたくしは、香川県育ちである。そして学生時代は京都にいた。農業関係の勉強をしていたので農村と都市の問題だとかいろいろそんな話題でにぎわっていた。そう、そこで死ぬほど聞かされたのは「東京は人が住むところじゃない」である。まあ、もっと具体的に翻訳すると「東京はお金がかかって俺には住めない」「東京は人が多くて苦手だ」ということだろう。だったら正直にそう言えばいいのだ。

なんだ。そんなことなら、なんとでもなる。お金かけなくても、いやむしろかけないほうが充実した生活できるのではない

か、そこが冒険だ。

お金をかけない贅沢な生活には、時間が必要なので、まずは生活が楽しくなる節約を考える。最初のターゲットは住居である。東京は家賃が高い。労働の3分の一は家賃のためだったりする。これは固定費である。経営において重要ポイントは、固定費をいかにして減らすかということである。だから家賃に手をつける。それと一緒に、住居についてちょっと考えてみる。住居といっても、ご飯作る、食べる、眠るところであり、人と語らう場所、作業スペース、思索の場、お風呂場。ここで、割に合わないところはどこか。

それは、お風呂だ。いま、大半のお風呂はユニットバスである。ユニットバスはトイレとフロを樹脂で整形して一体になった代物。東京オリンピックのときに、安く早くフロを仕上げて突貫工事を実現するために開発された。これがひどい。お湯の量が少ないからすぐに冷え、カーテンに体があたろうものなら冷えた水滴とともにべったり気持ち悪くまとわりつく。これが普及したならば、米騒動並みの暴動が起こってしかるべき非人間性である。よってこのユニットバスを切る、フロ無し物件などまるで選択肢にない人が多いだろうが、そこが冒険だ。ユニットバス切りをすると、何が起るか、広くて安く家が借りられるうえにお風呂が文化を楽しめる娯楽にすら昇格するのである、おまけにお風呂掃除しなくてもよくなる。高い家賃を払っていいところに住むか、安い家賃で我慢するかというトレードオフをぶっ壊した新たなオプション。意外に東京にはフロ無しだが

質のいい物件というのはある。銭湯の上階物件もけっこうあるので、これもねらい目だ。また、銭湯代は高いというが、毎日入ってもせいぜい1万円ちょいである。フロ無し物件は同じ広さの物件より2.3万円下がりで、水、ガス代が浮く。なにより銭湯がよい、二階ぐらいの高さの天井に暑い湯船、宮大工が発案したという極楽への入り口をイメージしたと言われる寺社風の玄関が毎日出迎えてくれる。毎日極楽浄土へ行けるのだ。通うのが面倒というが、散歩が毎日できると思えば運動不足の現代社会にはうってつけた。そういう意味では銭湯に荷物を預けてランニングする銭湯ランナーは、新たな世界を切り開いた都市の冒険者だと思う。

次に、外食。素晴らしいお店もあるが、ただ高いだけのお店もある。それなら、自分でいい素材を思い切り使って食べたほうがうまい。そして、料理をすると頭がすっきりする。家事は、発狂防止装

置である。決まった作業をやって、はっきりした結果が見える、こんなシンプルな作業は現代にどれだけあるだろうか。こういうことをやらないと、精神的にはよくないだろう。できれば、自分だけで食うのはつまらないので、友人を呼ぶとよい。一緒につくってもいいし、片付けをしてもらおうと楽でいい。つくって食べて片づけを全部一人でやろうとするとしんどいし、自己完結しすぎてつまらないからだ。満腹の食後の片付けはきつい。それが解消される。お金はかからないのに、いいもの食べて、料理技術はあがるし、ただ話をするより作業と一緒にするほうが面白く、会話も弾む。ちなみに私は休日には手打ちうどんが定番だ。自前で打ち、こねるのが面白い、幼稚園児がこねるのがすきなのがよくわかる。そして、うまい。店よりはるかにうまい。いうことなしだが、てんぷら揚げても一人当たりせいぜい500円ですむ。だが分量さえ間違えなければ誰でもできる。切りがないのでやめるが一つ一つ考えていけば、お金をかけずに愉しく暮らす方法はいくらでもある。そういう方法を知っているからこそお金をかけるところではズバツと掛けられる。面白いイベントには迷わずいく、新しいお店には評判になる前に行ってみるという気持ちの余裕も生まれよう。

冒険とは未知への挑戦、都市にはその対象がいくらでも眠っている。個人的には次に引越すならばあえて4畳半の家に住み茶室のような空間で生活してみたいと思っている。

Hiroshi Ito
生活や人生と一体化できる仕事をつくる、をテーマにカマドのつき一軒家「下馬土間の家」の運営を行うナリワイの代表。モンゴル武者修行ツアーの企画や農業ウェブマガジンの編集長もやっています。





ニートニク宣言

text: 草薨洋平(東京ピストル)

現代では何も持たずに生きることこそが難しい。未路域がなくなり、無酸素で、フリークライミングで、サバイバルで、と人間の極限に挑むかのように切り捨てていった登山の歴史のように、とても勇気のいる行動になってしまった。

あらゆる場所に金が必要となり、消費社会に在る以上、消費せずにはいられない宿命を背負っている現代人にとって、物を所有しないという考えはホームレスになるに等しい。たった数十年前に物を持とうとしなかったヒッピー・ムーブメント自体がおとし話に思えてしまうほど、僕らは物に依存し、逃げられなくなってしまった。

そんないま、ニートについて僕は考えてしまう。

ニート (NEET) とは「Not currently engaged in Employment, Education

or Training」の略語。つまり「働いておらず、教育も訓練も受けていない」人たちの総称だ。英国政府が労働政策上の人口の分類として定義した言葉から生まれた。

「高校や大学などの学校及び予備校・専修学校などに通学しておらず、配偶者のいない独身者であり、ふだん収入を伴う仕事をしていない15歳以上 34歳以下の個人である」と、内閣府の「青少年の就労に関する研究調査」で一般的な日本のニートはこう定義されている。とはいえ「年齢は一切関係なく、教育も訓練も充分に受けたが働いていない」奴しか僕の周りにいないので、それらをニートと定義して呼んだ方がいいだろう。アホな政府筋には分からないだろうが、現実には多様で、周りにいるニートが教育も訓練も受けていない人ばかりではないことは誰もが知ってい

る。ただ彼らには、「働く意思だけ」がないのだ。

しかし働かない人たちこそ、国にとって悪い奴はいない。小泉内閣以降の政府がニートや引きこもりを無理矢理働かそうとつねづね尻を叩いているのは、何も親切心からではない。働くことによって日本の経済を成長させ、労働者にお金を使わせ、お金を循環させようとしているからだ。だから国はまったく生産性のないニートや引きこもりを現実の世界、すなわち消費社会に引っ張り出すよう努力している。それが今日までのメディアを使ったニート批判の根底にはあったといってもいいだろう。

だがニート批判は一方的で、ニートの人たちの心が国やメディア側にはまったく掴めていないと僕は思っている。彼らはニートたちの「自由」への憧れが分かっているのだ。働かないこと、自由に生きること、それは本来であればそれは個人の自由であるはずだ。また働かないで暮らせている社会、それは人間として理想の社会なのはいまでもない (労働から解放されるために人間は数々の発明をしてきたわ

けなのだから)。なぜ自由に生きようと思う人たちを批判するのか、そこに理由など本来は存在しないのだ。

再び、物を持たないということは、自由になることでなかったのかと考える。

余計な荷物を持たず、フリーハンドで社会を生きていく。僕らはそんな身軽な存在になりたっただけだ。そしてニートだけが、そうした存在であることを薄々僕らは気付いている。

そういえば古来の作家なり芸術家の人たちはほとんどニートに近いライフスタイルだった。ビートニク運動もニートの集団だったといっても過言ではない。オノ・ヨーコは日本の若者の"ひきこもり"現象を評価して「もしかしたら、彼らは現代の禅僧侶かもしれないですよ」と語っていたが、ニートは一遍上人のように都市を遊行しているのかもしれない。

ニートは徒手空拳で都市を冒険する。彼らは社会が強制する一点を巧妙に避けることによって、社会からより軽やかな存在として羽ばたいていく。彼らは都会のクライマーなのだ。僕はそうした自由な存在を

ニートニクと名付けたい。

ニートニクたちよ、増えろ。この抑圧ばかりしてくる世界と無職運動にて闘え。働くだけが人生じゃないのだ。より新しい挑戦として、僕はニートニクを全力で肯定する。



Yohei Kusanagi
「東京ピストル」代表。編集者。東京ピストルとして数多くのデザイン製作にも従事している。鈴木宗男をDJ & ラッパーとしてクラブに招き、クラブをつぶした伝説的なクラブイベント「ムネオナイト」の主催者でもある。現在ビートニクと拮抗するニートニク運動を起こすべく、無職団体「ニートニク」を構想中。

Freegan 深夜のスーパーには ゴミが無い？

text: 清田直博(Media Surf Communications Inc.)



フリーガンとは、都市で発生するまだ使えそうなゴミを再利用して生活する人々のこと。その本場はアメリカ、ニューヨーク。以前NHKで特集されていた彼らの映像を見て触発された我々TDFクルーは、東京でもフリーガンやりたいよね、だけどそれってホームレスじゃん、いや違うでしょ、オレらも家具拾ってきて使ったりするじゃん、だけど食料って抵抗あるよね、スーツ着てやれば大丈夫かしら？ などケンケンガクガク、まずは街に出てみなきゃ始まらないでしょ、ということで池尻・渋谷・原宿・六本木境界のゴミ置き場を漁りに行くことに。今回の獲物は食料品。ターゲットは高級食材スーパー。

深夜12時を回り、通行人も減ったところを見計らっていざ出勤。一軒目は青山通りのK乃国屋。最近新しくできたビルの1F、正面にゴミは無く、裏口だろうということで裏に回るが何も無い、地下の運搬口に違いない、と地下駐車場に行ったものの、人目につく場所にゴミらしきものはない。賞味期限切れもしくはラインギリギリの食料や生鮮食品は毎日きつと廃棄されるはずなのに、従業員用の鉄扉の向こうにお宝があるのか？ 二軒目は六本木ヒルズ、TSUTAYA 横のスーパー (名前は忘れた)。さっきよりグレードも落ちるし、ここなら、と思って探したがどこにもない。三軒目は六本木通りのS城石E。ここにもない。庶民派スーパーなら、と池尻の○正とOゼキを



漁ってみたがペットボトルや牛乳パックしか見当たらない。ニューヨークの映像では、店の前のゴミ箱からザクザク食料品出てきてたのになあ、おかしいなあ。唯一食料が見つかった場所は道玄坂のロツ〇リア。ゴミ袋の中からパンなどが見つかったが、いっしょにパンの切れ端をくわえたミッキーが顔を出し、排水溝の中へ一瞬のうちに消えていった、その瞬間、心が折れた・・・

このように、東京のスーパーから出るゴミは、我々一般人の目には触れない場所へ、かなり厳重に隠蔽されているようだ。スーパーの広報にゴミが見つからないと苦情の電話を入れてみると (クレマーかよ)、専門の業者が店舗毎に決まった時間に回収に来るとのこと。奴らはこちらの一瞬のスキをついてゴミを持ち去っていたのだ！ (なぜか被害者意識むき出し) 東京でフリーガンをやるのはそんなに甘いもんじゃない、ということだけが分かった。今後、対応策を検討していきます。(情報求む！)

古くて新しい江戸の社会

text: 萱原正嗣(カヤハラマサツグ)

1800年当時の世界の都市の人口は、ロンドン86万人、北京90万人、上海5万人、パリ54万人、ニューヨーク6万人と推定されている。同じ頃、江戸の人口は100万人を超え、世界一の人口を誇っていたと言われていた。京都や大阪の人口も40万人を超えていた。日本全体では3000万人の人々が暮らしていたが、人口1万人を超える街が各所にあり、都市型の社会が形成されていた。

これだけの都市人口を賄いつつも、都市近郊には豊かな自然が溢れ、都市自体もヨーロッパの諸都市と比べると極めて清潔な状態を保っていたという。その秘訣は、江戸時代の都市が循環型の社会を形成していたことにある。

当時のエネルギーの中心は薪炭だ。薪炭の源となる木々は、何年もかけて育てた森林ではなくて、毎年次々に生えてくる雑木で、太陽がもたらす恵みのなかからエネルギーを得ていたことになる。薪炭を燃やすとエネルギーの代わりに灰が残るが、この灰も肥料や塗料の上薬など、様々な用途のためにリサイクルされていた。「灰買人」と呼ばれる人々が灰を回収し、灰を取り扱う「灰屋」は巨富を得たと言われている。

都市の胃袋を支えるのに一役買っていたのが、都市近郊の農民たちだ。彼らは生鮮野菜を都市に供給していたが、都市に住む人々も、農民たちに供給しているものがあつた。それが、

都市の生活廃棄物である人糞尿で、「下肥 (しもごえ)」という肥料として取引されていた。大名屋敷では出入りの百姓が決まっていた、一定の代価と引き換えに汲み取りをさせていたし、庶民が住む長屋では、大家が下肥の処分権を持っていたが、下肥を提供する代わりに住人は家賃を支払う必要がなかったほどだ。「下肥問屋」という回収業が商売として成り立っていった。

他にも、衣類や紙をはじめ、ありとあらゆるものが徹底的にリサイクルされていた。だが、こうした循環型の社会が江戸時代の当初から形成されていたわけではない。戦国時代から江戸時代の初期にかけては、大規模開発の時代が続いていた。

強大な武力をもった領主の出現により、大規模な治水工事が行われるようになる。それに伴い新田開発も奨励された。1720年ごろの耕地面積は、1600年ごろと比べると1.8倍にもなっている。それが人口増加を支えたことは想像に難くない。一方で、急激な新田開発が耕地の地力を削ぐことにもつながった。というのも、当時の肥料は山野に生える若草・若芽を刈り取って、それを田畑に敷き込み肥料にする「刈敷 (かりしき)」というのが中心だったが、刈敷の供給源であつた採草地までもが新田開発の対象となつたからだった。

また、街道の整備や城下町の建設も相次いで行われ、莫大な量の木材

が必要とされた。山林開発の結果、森林資源が急速に枯渇するとともに、山林の保水力が弱まり、全国で洪水が頻発するようになる。

こうした開発至上主義と訣別し、植林を奨励するなど、国土の復興に力を注ぐ政策へと転換したのが1660年 (万治3年)の「諸国山川掟」だった。農政においても、限られた農地の中でいかに収量を上げていくか、ということに力点が置かれるようになる。江戸時代中期以降、あらゆるものが循環利用されるようになったのには、こうした背景がある。

飢饉や百姓一揆があつたことから、江戸時代をのどかなユートピアと見ることはできないだろうし、リサイクルをしていたのは生活の必要性からであつて、好き好んでのことではない、という指摘もあるだろう。だが、限られた資源を活用し、自然と共存しながら日本で3000万人の人が生きていた、ということ自体がすごいことではないかと思う。

江戸時代初期の日本の状況は、現代の世界が置かれている状況に似ているように見える。いくらでもあると考えれば際限なく欲望を満たそうとするのも人間なら、無いなら無いなりに工夫して生きていくのも人間ではないかと思う。地球を食い尽くす前に、知恵の使い方を変える必要がある。そのヒントをよそ様や横文字に求めるのもいいが、日本の歴史も捨てたものではない。



自転車で働く 吉祥寺の玄米ワッフル店 「夕焼けこやけ」角井愛さん

interview & text: 清田直博(Media Surf Communications Inc.)

シンプルで自由な乗りもの、自転車。その自転車に乗って新たな働き方、ライフスタイルを実践し始めている人たちがいます。なかでも吉祥寺は自転車で移動販売をしているワッフル屋さんやビスケット屋さんなど続々と出現中で、スイーツに目がない女子たちを虜にしている模様。カフェやレストランで修行した彼らが作り出すスイーツは、素材の一つひとつにこだわり味も確か。独立開業の新しいスタイルとして自転車をチョイスする、そんな肩ひじ張らないナチュラルさが現代の気分なのです。

その吉祥寺で約4年前にスタートし、木箱を積んだアンティーク自転車で作手り玄米ワッフルを販売する自転車系スイーツの元祖のようなお店が「夕焼けこやけ」。店主で笑顔のとても素敵な角井愛さんにお会いし、いままでの道のりをお聞きました。

学生時代から旅行が好きな角井さん。就職活動で走りまわる友達を見て違和感を感じ、大学卒業後にネパールへ3ヶ月間の1人旅へ。そこで現地のファミリーの優しさや街の活気に触れて人生観が変わり、帰国後は飲食の道に進もうと六本木の日本茶カフェで働き始めるように。「高い商品をやりとりするような仕事ではなくて、お客さんとコーヒー1杯を通じてやりとりするシンプルな関係がいいなと思って、飲食をやることにしました。ネパールから帰ってからは六本木にある日本茶カフェで働き始めて、仕事は楽しかったのですが、とにかくいそがしくて。学生時代から好きだった武蔵野で、子供からお年寄りまで気軽にやり取りできる、地域に根付いた仕事がしたいなと感じるようになったんです。」

何かの菌車になるのではなく自分のペースで、自分らしく生きる方法はないかと考えていたところ、ネパールの路上で見た自転車販売を思い出し、独立開業を決意。保健所に通い詰めて、前例のなかった自転車移動販売での営業許可を若さと情熱でゲットし、お店をスタート。「開業当時は怖いもの知らずでしたね。いろんな人が助けてくれたおかげでお店をスタートできました。1個200円のワッフルを売っているというだけではなくて、やさしい気持ちもいっしょに売りたいと思っています。安い原価で高く売るとというのが商売だけど、それだとちょっと悪いことをしている気持ちになってしまうんです。本当に身体にいい物を安く提供して、いいことをやっているんだという気持ちがお給料というか。そこに葛藤がないことが精神的にもいいんです。どうやれば儲かるかは分かっているんですけどね。懷はちょっと寂しいかもしれないけど、心は愛情でいっぱい、みたいなスタイルでやっているのので他の商売をやっている人からはなかなか理解してもらえないですね。物欲も無いし、必要以上に儲からなくてもちゃんと食べていけて、自分らしい生き方をしていきたいんです。」

地域のお客さんに支えられ今年で4年。冬の寒い時期には出店場所の木にカイロを貼っておいてくれるお客さんも。朝はヨガの練習をして11時半からは三鷹のジブ



リ美術館前でお店を出す。1日に50個から60個作るワッフルも1,2時間ですぐに売り切れてしまうそう。閉店後は仕入れや仕込みをやって毎日9時過ぎには寝るとい、自分らしくてシンプルな生活。「数字はすごく苦手なんですけど、わたしがこのお仕事で学んだのはおいしいワッフルの作り方でもなく、うまいビジネスの回し方でもなく、見返りを求めないで優しくしてくれる人達、慈しみの気持ちというか、そういうあったかい気持ちを勉強した気がし

ます。人生の中で持ち物は少ない方がいいですね。仕事もプライベートも移動は全部自転車です。シンプルな方がお客さんにも感じてもらいやすいんです。いろんなお話を頂くのですが、しばらくはこのスタイルでやれるところまでやりたいですね。

自転車移動販売 夕焼けこやけ(吉祥寺)
販売場所 土・日:中道通り wickie前/月・水:ジブリ美術館入口/木:武蔵野大学/金:中道通り西公園前
営業時間:12時~売り切れまで 火曜定休
お問合せ:夕焼けこやけ店主 角井愛 090-7637-6357

ハンモックで楽しむ都市ライフ(自宅や公園で)

text: みちやま(里山はんもっく代表)



「ハンモック」と「日常生活」は、なかなか結びつかないのではないだろうか?そこで今回は、都会に住む人にこそおすすめした

い、ハンモックのふだん使いの様子を紹介する。まず、ハンモックは自然の中でゆらゆらするだけのものだと思われているが、都市ならではの楽しみ方がある。コーヒーを飲みながらの読書、ポップコーンを食べながらの映画鑑賞や、好きな音楽に浸る自分だけの時間に。仕事で煮詰まったときの仮眠スペースに。野外で使うなら、寒い冬がベストシーズン。寝袋や毛布で防寒しさえすれば、最高に気持ちがいい! 空気が澄んでいるので、深呼吸をすると酸素が体の隅々まで

いきわたるのがわかるし、木漏れ日や雲の様子がより鮮やかに目に映る。人は少ないし、蚊もいない。



設置の仕方は、木と木の間にロープで吊るすイメージが強いが、木のない公園や室内でも簡単に設置できる。よく「賃貸なので壁に穴をあけられない」「スペースがとれない」という声を聞く。そんな時は、壁に穴を開けずに、使うときだけ付けられる方法を紹介している。また都内には約50の大きな公園がある。(小さい公園も入れると100以上)自宅の近くに必ず1つは公園や緑地があるはずだ。設置スポット探しの相談にものっている。

ハンモックに包まれた状態は、赤ちゃんのとき、母親のおなかの中で守られていた空間に似ていて心地良い。自然とやさしい笑顔がこぼれ、無邪気だった頃の自分を取り戻すことができる。無邪気な笑顔の周りには、笑顔が溢れる。ハンモックは幸せの輪を広げてくれる最高のアイテムだ。ぜひ一度試してみてください。



里山ハンモック
ハンモックが与える影響に魅力を感じ、もっと多くの人の生活に取り入れてもらいたいという願いからハンモック屋として開業。仕事はハンモックの販売、レンタル、イベント、研究、開発と何でもしている。また、里の保護、育成活動にも力を入れている。
里山ハンモック→<http://michiyama.blog17.fc2.com/blog-entry-48.html>
ホームページ(現在作成中)→<http://www.kaniyama.com/>
ツリーハウス製作プロジェクト→<http://kininaruhouse.web.fc2.com/>

“セガレ”というプラットフォーム

「継ぐ・継がない」の前に、セガレ。

interview & text: 田中佑資(TOKYO DESIGN FLOW), ナゴヤアツシ(セガレ)

農家を継がずに、東京で働く農家の息子(セガレ)や娘(セガール)によるプロジェクト“セガレ”。最近メディアでも引っ張りだこの彼らに、これまでの活動で得てきたものと、今後のビジョンについて聞きました。

TOKYO DESIGN FLOWでは初期のころからお世話になっています。最近の“セガレ”について教えてください。

プロジェクトを始めてから1年半が経ちますが、みんな同じことを考えていたんだなあ、と感じています。というのも、「農業について、何かしたいと思ってたけど、一人では動けなかった。ぜひ一緒にやりたい」という問い合わせが、すごく多いんです。僕らも「実家や地元、農業に対して何かがしたい」というところから、スクーリング・パッドで出会った仲間3人で“セガレ”を始めました。だからその気持ちが大



くわかるし、仲間が増えていくのが嬉しいんです。

いまは農業に対する注目度も上がってきていますね。でも、“セガレ”には農業という視点以外にも面白さがある気がするんです。

“セガレ”には農業、親孝行、地域活性などいろいろな見方・切り口があると思

いますが、最近僕らは、“セガレ”を通じて「マイ・ワーク」というコンセプトも発信していきたいと思っています。都会で働きながらも、週末を使って、農業に対して主体的にアプローチしていく。「こうだったらいいな」「こうしたいな」ということに向かって、できるところから行動を始めていく。趣味でもなく、仕事でもないけれども、



その人にとっては大事なことを突き詰めていく。それを「マイ・ワーク」と呼んで、仲間を募っていききたいな。特に農業の場合、情報と選択肢が少ないので、「継ぐか・継がないか」という二択で迷ってしまったら、「何かしたいけど」で止まってしまうことが多いんです。そういう人たちに“セガレ”という選択肢を知ってもらい、一緒に動きながら新しい道を考えていきたいです。

今、“セガレ”の中ではどんなプロジェクトが動いているんですか?

定期的に行っているのは、「実家の野菜を売るぞ!」プロジェクトですね。TOKYO DESIGN FLOWのFarmer's Market @ GYREのような場所に出店して、実家の野菜・果物を販売しています。他にも「セガレカイギ」や「米づくりツアー」、「100%おやじ酒」など5,6個のプロジェクトが並行して動いている感じです。

今後はセガレ向けのツール開発やサービス提供などもやっていきたいと思っています。去年、米農家のセガレ・セガール向けに実家の米用米袋をデザインしたんですね。これが思いの外好評です。「実家のお米をおす分けしたいけど、ビニール袋で分けるのも・・・」と感じてた人が、何10枚もまとめて買いたたりしてくれている

んです。僕ら自身がセガレだからこそわかるニーズが間違いなくあって、それを解決していけば、喜んでくれる人がたくさんいるということが分かりました。今後はセガレ・セガールというキーワードでつながりを持ちながら、それぞれの思いのあるプロジェクトを発信していく。そんなコミュニティというかセガレ・セガールたちのプラットフォームをつくっていききたいと思っています。



(株)セガレ
農家を継がずに、東京で働く農家の息子(セガレ)や娘(セガール)が始めたプロジェクト。継いでいない後ろめたさを抱えつつも、東京にいなから農業や地元のために何かできないかと農業との新しいかわり方を模索中。
www.segare.jp



東京野草 ～都市での農的生活をめざして～

草摘み&調理 &text: 田中佑資 (TOKYO DESIGN FLOW)

東京をコンクリート・ジャングルと呼んだのは誰なんだろう。目に入るあらゆるものが“人が造りしもの”である大都市・東京。ここには資本主義というシステムがあって、水を飲むにも、何かを食べるにも、自転車をちょっと置いておくのにもお金が必要だ。お金は否定しないけど、お金がなくなっちゃ豊かに生きていけないわけじゃあない。大都市・東京で自然とつながった“農的生活”ができないものか。今回はTOKYO WILD FOOD、野草を巡る旅に出た。

半兵エという居酒屋でスズメを食べたことがある。けっこう美味しかった。中国ではネコやイヌも貴重な食料らしい。そういえば、日本の昆虫食文化は世界でも最高水準だと聞いたことがある。世の中、見渡せばお金がなくても、食べられるものがあるのだ。とはいえ、スズメを獲って食べるのも、イヌやネコを食べるのも、ましてや昆虫も、ちょっとハードルが高すぎる(豊かに食べる自信もない)。。。そうだ!都市の環境にも負けずに生えている野



草。今回は彼らを探して、そして調理して食べてみよう。農的生活の、第一歩! まずは買ったばかりのバイブル片手に、自宅前の川辺へ。初心者なので、簡単に見分けがつくナズナ(ペンペン草)を探す。お、あったあった。懐かしいなーよくペンペンしたなー、と思いながら、収穫。いただきます。続いてタンポポもGET! なんと一くヨモギっばい葉っぱを見つけたので、匂いを確認して、でも花粉症でよくわからず、とりあえず袋のなかへ。美味

しい天ぶらができそう。探す過程も宝探しみたいで楽しい。川辺を一通り探索したあとは、都内の公園へ。まずは世田谷公園、そして代々木公園を散策。どちらも緑はあるのだけど、よく管理されている証拠か、食べられそうな野草はあまり見つからず。。。「あ、こんにちはー。美味しそうなワンちゃんです(冗談ですよ、思ってませんよ)」さて、めばしいところをぐるっと回ったところで、今回の収穫はナズナ・タンポポの



生命を紡ぐ小さな働きもの

ミツバチが、銀座の空の景色を変えようとしている。

interview & text: 萱原正嗣 (カヤハラマサツグ)



東京都中央区銀座。高級ファッションブランドや数々の老舗が軒を構える、日本有数の商業地だ。その上空に、豊かな生命のつながりが生まれている。主役は、小さくも勤勉な働きもの。その働きものが銀座にやってきたのは、2006年春のことだった。銀座三丁目にある11階建てのビルの屋上に、その働きものは住み家を構えた。3万匹の仲間とともに。住み家を提供したのは、NPO法人銀座ミツバチプロジェクト。そう、その働きものとは、ミツバチのことだ。ミツバチは、巣から4Km圏内の花粉と花蜜を食料に生きている。花粉は幼虫を育てるタンパク源、花蜜はエネルギー源、人間にとっての肉・魚とお米のようなものだ。銀座にはビルが林立しているが、1.2kmも行けば浜離宮があり、1.5kmの距離には皇居がある。そこには、溢れんばかりの緑がある。銀座の街中にも街路樹はあるし、皇居の外周には花蜜の豊富なユリノキがある。銀座マロニエ通りには、その名の通りマロニエ(トチノキ)の樹が植えられている。しかも、皇居では在来種を保護するために農薬を使っていないということだし、中央区でも、アレルギー患者の増加に対応するために農薬を使わないようにしているという。近年ミツバチと養蜂家が悩まされている農薬の問題も、偶

然にも免れえたということだ。銀座は、安全な植物の種類も量も豊富で、ミツバチにとってのユートピアだったのかもしれない。銀座に住み始めて2カ月でミツバチは15万匹までに増え、初年度は150Kgもの蜂蜜が採れた。翌2007年には290Kgの蜂蜜が採れたが、これは国内で生産される蜂蜜の0.1%にも相当する量だ。そして、銀座のミツバチが、銀座の空の景色をも変えようとしている。銀座ミツバチプロジェクトの理念は「都市と自然の共生」だが、その理念に共鳴したテレビ朝日の環境ドキュメンタリー番組「素敵な宇宙船地球号」が「銀座グリーンプロジェクト」を2007年4月に始動した。そのなかで、松屋銀座で屋上緑化ならぬ屋上農化が進められ、ゴーヤにミニトマト、オクラにパプリカ、多くの野菜が植えられ実を結んだ。2008年には、同プロジェクトに白鶴酒造が参加し、8階建ての東京支社の屋上に水田が出現した。作っているのは酒米で、採れたお米から「銀座産」のお酒を試験的に醸造している。蜂蜜に続き、銀座を生産地にしようという試みだ。他にも、マロニエゲートや銀座ブロッサムの上でもハーブや野菜の栽培が始まっている。ミツバチが来るなら屋上に緑を植えよう、どうせなら食べられるものを育てよう、そんな気運が銀座に満ちている。この小さくも勤勉な働きものは、人間に蜂蜜をもたらすだけではない。人間が生きていく上で必要な恵みをもたらす根本的な役割を担っている。受粉だ。多くの植物は、雄と雌の交配の多くをミツバチに頼っている。受粉(交配)がなければ、秋は訪れても実りはない。ミツバチがいなく

なったら、日々の食卓の風景は恐ろしいまでに殺風景になるだろう。そして今、北米やヨーロッパで大量のミツバチが謎の失踪を遂げるという事件が起きている。CCD(蜂群崩壊症候群)と呼ばれる現象で、2006年から2007年の春にかけて、北半球に住むミツバチの四分の一がいなくなったという。農薬、害虫、温暖化、単一作物栽培による弊害など、さまざまな要因が指摘されているが、詳しい原因は解明されていない。原因はともかくも、ミツバチの大量失踪という現象から、工業化されたアメリカ型大規模農業の限界を指摘する声もある。銀座のハチは、都市に住む人々に、生命の営み、つながりを気付かせてくれた。春の訪れは近い。今年もまた、ミツバチが銀座の空へと飛び立っていく。



Masatsugu Kayahara
もの書きの傍ら企画・編集にも携わる。昭和51年生まれ。京都大学法学部卒。IT企業に就職するも8年で脱サラ。現在は環境、農業、仕事(働き方)について筆を執る日々を過ごす。
<http://kayamasa.blog59.fc2.com/>

葉・ヨモギ(っばいやつ)。どれもバイブルが太鼓判を押している美味しい(?)野草。よし、オフィスに戻って早速調理するぞ、と。今日のメニューは、野草の天ぷら!



れ俺も・・確かに食べられる!」「うん、食べなくはないね」「私も食べるー」あれだけあった野草も、食べ始めたら一気に空に。思ったほどの臭みも苦味もなく、割と美味しく食べられました。でも、精神的な問題なのか、後味が少し。。。きっとこれは野生がもつエネルギーがゆえでしょう。

TOKYO WILD FOOD、あなどれません。

今回は農的生活の第一歩として“野草”にチャレンジしてみました。バイブル片手に野草を探す過程は楽しくて、調理中も、普段とは違うドキドキ感が癖になりそうでした。でも。ここで言っちゃうのもアレですが、都市のど真ん中で野草を摘むのは、僕らの求めているものとはちょっと違うのかもしれません。もっと良い(キレイな野草がある)スポットを探すか、もしくは、小さくても自分で野菜を育てる、という方向性を探るのが農的生活としては良さそうです。今後、もっと深めていきたいと思います。



じゃん! 美味しそうに揚がりました。今回は野草の味を味わうために、シンプルに塩のみでいただくことにします。……果たして誰が最初に天ぷらを食べるのか。みんなの注目が一挙に集まります。

パクッ。「お・・・食べられる!」「どれど

Monoflow(物々交換)

text: 長谷川守 (TOKYO DESIGN FLOW)

不況が執拗に騒がれる今、生活の出費をできる限り抑えようとする傾向が強まって来ている。余計な買い物はしない、外食や旅行も控える。とことんお金を使いたくないならタダで貰うか、何かと交換してもらえない。部屋を整理するたびに出てくる使わなくなったいらぬ物をほしい物と交換できたら一石二鳥だ。インターネットには物々交換の場がいろいろある。ヤフーなどの大手ポータルサイトを始め、モノチェンなど多くの物々交換専門サイトが利用できる。基本的な参加方法としてはアカウント登録を済ませて出品したい物を掲載、条件に見合ったオファーを待つ。交換相手が現れ、その後取り引きが成立すればお互い郵送費を支払って品物を送ってもらうという流れだ。SNSサイトのミクシィには、もらいものコミュニティなるものがあり、その名の通り出品された物をタダで手に入れることができる。出品者が近所に住んでいれば直接受け取りに行けるし人によっては直接届けてくれることもあるという。品物を直接見たり触れたりしたければ、各地で開かれている蚤の市のような場所に足を運ぶのもいい。入場料がかかる場合があるが、多くの開催場ではコンサートなどの様々なイベントが催され、週末のアミューズメントとして定着しつつある。変り種としては最近話題になったアメリカ人の1年にわたる物々交換の軌跡を追ったブログ。自宅にあった何の変哲もない赤いペーパークリップを元手に、次々と同等かそれ以上の物を交換し続け、最終的には目標としていた一軒

の家を手に入れてしまった。嘘のような本当のこの話は多くの人の関心をさらい夢を与えた。日本でもエコ社会を意識してかトヨタのプリウス獲得を掲げて、一膳のMy箸からスタートしたわらしべ長者がいる。アイデアの斬新さとメディア露出による効果を考えると、誰でも簡単にマネできる芸当ではないかもしれないが、交換していく物とやり方次第では案外うまくいくかもしれない。お金は本来、生活を少し便利にするためのツールの一つに過ぎない。物の価値をすべて数字に置き換えようとするのはきつと悪い癖だ。物の真価が分からない。おかげで値札のない物々交換の場では不釣合いな取り引きが頻繁に起こる。クリップがたった1年で家に化けたのもその辺りの価値基準のズレがなしたものでしょうと思うと一興だ。モノを見直し、活かす。新しい価値基準、それは往々にして古い考え方だったりする。その昔、お金という概念すら無かった時代に立ち返ってみよう。



ザッターのなかの フッコーとカッター

緑のない砂漠が増えないことを願っています。

text: 大隅祐輔 (TOKYO DESIGN FLOW)

都内の雑踏の中にふと存在する代々木公園。そこを行き交う人も多種多様。さまざまなカラーがこの場を賑わし、さまざまなコミュニティが出入りしています。

代々木にあった練兵場が第二次世界大戦の日本の敗北によって接収され、アメリカ軍宿舍「ワシントン・ハイツ」が建設されました。その後、日本の復興に伴い返還運動がさかんになり、東京オリンピックを期に広大な土地の返還が行われ、故・丹下健三設計による代々木体育館と選手村が誕生しました。経済の発達／日本の復興／技術力の飛躍の起点となったわけですが、今の代々木公園に当たる選手村もこれらの象徴的な存在として立ち現れた場でした。

今現在は東京の都心にあるとは思えないほど、広大で緑豊かな場所となっています。そして、老若男女、階級問わずあらゆる方法で付属の施設を含め利用され、野外音楽堂では「B-BOY PARK」等のイベントが、比較的不良の文化と思われるがちなヒップホップという音楽を用いて急進的な方法でコミュニティ形成に一役買っています。B-BOY PARKは、かつて原宿の街を賑わせたホコ天のような開放的なオープンスペースで、「ストリートカルチャー／日本オリジナルのHIPHOPシーンを若い世代に健全な文化として理解を深めるための入場無料のお祭り」というのがコンセプトです。

一方で、人にとってのみオープンなのではなく、先日久々の代々木公園散歩をしたところ、カラスがやたらと多い……。この日に限ったことではなく、写真のように当たり前のようにカラスの出現率が高く、よく人に危害を与えるのでしょう。余談ですが、実はカラスは食べることができるそうです。明らかにあの黒光りした身体からは想像がつかないですが、食した人の意見ではクジラの肉の味に似ているらしいです。代々木公園でのサバイヴにはもってこいかもしれません。その代わり、当然捕獲が困難というかなりのリスクを伴います(笑)。

2016年オリンピックの舞台に、ここ東京も立候補しています。次の選手村の建設地も決定しており、「江東区有明1丁目」の埋め立て地がその場所になると公表されています。コンセプトは「みどり」と水に囲

まれた自然の中で、選手が安全、安心、快適に滞在できる居住空間」。各人が宿泊する部屋には防音、インターネット設備。高層棟の最上階には“グレードの高い”レストラン、展望台。選手村内部では映画館、クラブ、ゲームセンターなどのレジャー施設を完備。生体認証システムなどによる最新のセキュリティシステムを導入等々……。東京が開催地になり、選手村が作られ、そしてオリンピック後、跡地は代々木公園のような「都会のオアシス」的な場所になることができるでしょうか。緑のない砂漠が増えないことを願っています。オリンピックは楽しみですけどね。



「ガラスに注意」の標識。標識自体がきれいなことから最近設置したものと思われる。



2016年版選手村の完成予想図のごく一部。写真の通り高層ビルと陳列された樹木が目立つ。

参考資料
第31回オリンピック競技大会開催概要計画書
http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2006/06/DATA/20g6u700.pdf

アーバンキャンパー、都会の遊牧民。

大都会の一等地にキャンプしよう! しかもタダで。

text: 三輪ノブヨシ



アーティストのテント。今日は留守だが、休日にはこのテントの前に人の輪ができる。

世界には旅をしながら生きている人は珍しくない。遊牧民はいい例だ。旅は楽しい。知らない土地へ行く。好奇心の塊になる。他の人たちは、私を楽しませるエキストラだ。旅は普段の生活と違うほど楽しい。それが刺激になるから旅に出るのだ。

そこまで刺激を求めなくても、自由であるという意味でキャンパーのような移動可能な生活があってもいい。土地やいろいろなことに縛られない生き方。東京の都心にキャンプしよう。それも緑の森の中。タダで都心に住めて、家賃に消えるはずの収入も全部自分のために使えるとしたら、悪くない。それって、ホームレスじゃん、と思うかもしれないが、自ら楽しんで生きる姿勢が違う。自由人でありキャンパー。回りの目は少し厳しくなるけれど、それさえクリアすれば都会のキャンパーだ。

代々木公園で会った二人のアーティストはそんな自由な生活を楽しんでいる。火曜日は絵を描く会とカフェをやっている。飲み物代はお金でなく、なんでもいいから自分のものと交換。使わないものでもなんでもいい。土日もいろんな人が訪ねてきては、いろいろ話をして楽しんでいる。関係は対等だ。差し入れも自由。子供も遊びにくるし、ネコもいる。時間はゆったり流れている。

価値観もいろいろだから、自分が納得



代々木公園テント村。でテント生活をする人たちは現在40～50人。テントの数や場所、住人の名前など個人情報はずべて東京都によって管理されている。テントを張らずに野宿している人は実際もっといるらしい。(野宿の人は「あまちゃん」と呼ばれている。)

する人生はいろいろあっていい。人がなると言おうと、結局は自分の人生なので、自由なのだ。とは言え、日本人の価値観は狭い。人の目や人の評価ばかり気にしていて、実際楽しく生きている人はどれほどだろう？

ホームレスになることを勧めるわけでもないし、賛美するわけでもない。実際の状況は厳しいだろう。ただ、全く同じ状況でも、アーバンキャンパーとして生きたら

れば、そこには卑屈さもネガティブな状況もない。都会の自由人として、他の人には感じることでできないことを、私たちにシェアしてくれる存在になりうるのだ。

Nobuyoshi Miwa
立休アーティスト、インテリアデザイナー、自転車デザイナー。1998年、自己流にて彫刻っぽい家具をデザインし自作自銷、その趣味を仕事にして現在に至る。華やかな経歴はないが、奇跡的にこれで充分食えてる。仕事系三輪自転車普及を企む。変わったデザインの自転車のコレクションもあり。

DIY or Diatribe

コミュニティの団結を音楽によって
より強固にしたブロックパーティ

text: 大隅祐輔 (TOKYO DESIGN FLOW)

1970年代から続くブロックパーティと呼ばれる公共空間があることを知っていますか？ 06年、デイヴ・シャベル企画／制作、ミシェル・ゴンドリー監督の映画『BLOCK PARTY』で存在を知った人は多いと思います。

この映画のように「多くの有名ミュージシャンが集まる特殊な野外ステージで行われるフェスのような音楽パーティ」だけをブロックパーティというのではなく、“block”つまり「公共の区画内部で行われる音楽を中心とするパーティ」というのがごく単純な定義。この文章もそんな勘違いから書き

出しましたが、では、どうしてごく一般的なアメリカの文化が映画化され、コーディー・チェズナットが「神の恩恵によって出演する機会を得た」というくらいのパワーを持つのでしょうか？

ベトナム戦争を直接的な背景にもつこの文化は反戦デモとともに拡大し、警察による抑圧はこれに拍車をかけることになりました。ベトナム戦争の軍事支出の増大による黒人の貧困を訴えたマーティン・ルーサー・キング。ブロックパーティでのサウンドシステムは非合法に引っ張られてきた電源を使用していたが、警察は弾圧によ

るパーティを楽しんでいる集団の暴動を避けるためこれを許していました。

もしくは、これは僕の見解ですが、ベトナム戦争を期に黒人が戦場に立つようになります。決してなし得なかった黒人、白人間の融和がこれによってなされたわけですが、白人と共に戦うなどの法的、公的権利を得るようになったのにも関わらず、黒人が一人間としての尊厳を与えられない状況を表面的に覆い隠そうとした濁しの態度によって、隔てのないブロックパーティが盛り上がりを見せたのではないのでしょうか？

キング牧師はそうした状況を「皮肉な結果」と述べています。結局は本質的な改善はこの時点では起きなかったのだと言えます。こういった背景があるからこそ、黒人にとってブロックパーティは意義のある場として存在しています。

しかしながら、ブロックパーティ誕生の時代より、継続して情報を発信しているウィスコンシン大学の有志による「THE BADGER HERALD」曰く、今現在では

“騒々しい歴史”という明らかな軽視をされ、単純にハッピーなパーティとして継続されているのです。

音楽にとって必要なものは愛、リスペクト。共有され得る、決して個人では成立しない、お金に代え難いもの。TOKYO DESIGN FLOW が今回テーマとして掲げるアーバンユートピアとしての場は、当時では、コミュニティの団結を音楽によってより強固にしたブロックパーティだったのだと思います。

メディアの発達、安売りされる音楽データによって以前より容易に楽曲を手に入れることは言うまでもないことです。自分で足を運び、レコードを“掘る”ことをしなくても、コンピュータのブラウザ上にゴロゴロとデータが転がっています。同時に音楽の制作方法も楽器を奏でる、歌を歌うという本来的に持っている人間の能力を無視するかのよう

に機械やコンピュータにのみ頼る人が多く存在しています。
先に紹介したコーディー・チェズナットは今なお4トラックのテーブルレコーダ、ギター、

歌、ヘッドフォンのみで楽曲を制作している稀な人物です。『JUNK MEDIA』という音楽情報発信を主に行うウェブサイトに記載されているインタヴュー「DIY or Die」で、「ただ感じたまの音楽を自分自身で表現するためには昨今のコンピュータ中心のただ快適なツールに頼って、自分のキャラクターを捨てるようなことはしてはいけません」と述べています。

少しずつコンピュータも意識的に利用する人が増えてきてはいますが、コンピュータをベースとして楽曲を制作している僕自身も、こういった背景を知ること

で音楽の持つ本質的なパワーを決して忘れてはならないと常日頃から思ってしまうわけ



Cody ChesnuTT
「The Headphone Masterpiece」
(2002 / One Little Indian)



ポートランドに学ぶ都市の可能性

豊かな都市はお金ではなく、純粋な文化の力で創られていく

text：大矢知史 (TOKYO DESIGN FLOW)

アメリカ西海岸オレゴン州にあるポートランドという街がここ数年で注目を集めている。広大なアメリカの国土から見ると田舎に位置する土地であるが、今やNIKE、adidas、Wieden + Kennedy など時代をリードしてきたグローバル企業が拠点を構え、建築、プロダクト、サステナブルデザインで重要な働きをする企業が多数存在する。それに加え、ポートランドには有機農園が沢山あり、美味しいレストランも増えている。街の至る所にギャラリーがあり、アートが生活の一部となり、スポーツも生活に溶け込んでいる。かつて工場地帯だった場所はリノベーションされ、クリエイティブ産業のオフィス群へと姿を変えている。まさに、新旧が融合したハイブリッドな進化型都市と言えるだろう。そこには

日本の大企業特有のガラス張りの高層建築の嫌味臭さもない。生活する人々の呼吸のリズムを街から感じ取ることができる。大金があれば作れるという代物ではない。実際にこの土地を訪れて感じたことは、本質的な意味での“豊かさ”である。それは日本における大豪邸に住み、高級車に乗る豊かさとは異なるモノである。それは人々がそれぞれの身丈に合ったライフスタイルを創出し、その集合体が調和したリズムを生み出し、街全体が緩やかなリズムに浸り、そのリズムを体で感じた後に残る余韻だ。それは心に蓄積される豊かさなのかもしれない。今僕たちは東京という都市で日々生活を営み、活動をしている。経済大国を象徴する都市であることはいうまでもない

が、今経済が大きく揺れる中、我々が取り戻すべきなのは、経済力ではなく、本来有るべき豊かな都市の姿であることを忘れてはならない。数字が都市の豊かさを示す時代は終わったのだ。まあ、当たり前の話である。Tokyo Design Flowという運動体は都市の魅力を取り戻し、街に、そして生活する人々に還元していく活動でもある。我々の生活を形成する7つの要素[ART ,FASHION,FOOD,TRAVEL,SPORT, MUSIC and DEIGN]を街に落とし込み、魅力を取り戻す試みだ。日本はそれぞれの分野で突出しているにも関わらず縦に分断され、商業施設以外ではその恩恵を肌で感じることにできにくい構造となっている。不況の煽りを受け、我々が活動の拠点としている原宿の街には今年の頭から空き店舗が増え続けている。商業主義が蔓延した結果、街が抜け殻と化している。大人の都合と言ってしまえばそれまでも、それではあまりにも無責任ではなからうか。あくまで個人的な意見だが、商業主義によって文化が消費された結果に我々が支払う代償はあまりにも大きい。原宿の空き店舗をアーティスト達にアトリエとして開放し、文化が実際に生み出される現場を作っていくべきである。そこは週末にギャラリーとして一般に開放するこ



とによってアートやデザインが生活に溶け込み、作り手と受け手が近い距離で接する良い環境が生まれるはずだ。スポーツも同様である。東京にある施設は壁のように風景に溶け込めず目的もはっきりしないモノばかりである。都市生活に溶け込むスケートボードやバスケットボールなどのストリートスポーツがより身近になるように、施設や公園を作っていくべきである。それができてこそ、様々な人々の交流が生まれ、新しいポジティブな文化が生まれるのである。大きな若者たちを太陽の下で遊



ばせてほしい。豊かな都市はお金ではなく、純粋な文化の力で創られていくべきだとポートランドに行き、改めて思わされた。

春を喜び種を蒔く

北欧の農的ライフと暮らしの豊かさ

text：都築淳 (スクーリングパッド デザインコミュニケーション学部7期)



冬が長いその国の人たちにとって、春の訪れはとても楽しみなものだろう。彼らは夏の休暇に向けてサマーハウスでのイベントを考え、自分の畑で育つであろう野菜たちのことを考えながら、長い長い冬の夜を過ごす。北欧には、kolonilotter/コロニーロッテル(スウェーデン)、コロニヘーブ(デンマーク)、などと呼ばれる家庭菜園の形態がある。そこではまとまった広さの農地を細かく区分けし、それぞれを家庭菜園として賃貸して人々が思い思いの植物を育てている。コロニーロッテルには、簡単な調理をするスペースと農機具をしまうスペースしかない小さな小屋が併設されていて、暖かくなるとそこに出かけていって土いじりすることが人々の楽しみだそう。しかもこれは、サマーハウス、要は別荘を“持てない”人々(北欧では多くの人たちが夏休み用の別荘を持っている)が緑と親しむために考えだされた仕組みらしい。農地の広さうんぬんではなく、そうやって緑と親しみたいという思いを、多くの人々が持っているという

事実。決して温和とはいえない自然環境の中で、自然がもたらす恵みの大切さを思い知らされているぶん、こうした考えが育まれるのかもしれない。日本においても、自然に近く農的であろうとする試みは最近に始まったことではなく、昔から多くの思想家たちが農的であろうとした。人間と人間で、ひらめきとつながりを作るのが、人工物で囲まれた都市であるならば、人間と人間以外で、それを作るのが、自然で囲まれた田舎であるのではない。開かれた入口があり、関係する人々の価値観を揺さぶる何かと出会う場所は、都市においても田舎においても貴重な存在だ。閉鎖的になりがちな日本の田舎において、コロニーロッテルのようなオープンな農地所有のあり方はまだほとんど見られない。コロニーロッテルという農地所有の形態からは、都市にいて、毎日の仕事を片づけるだけでは得られない、人間と人間以外の関係性を確認・構築できることを一つの豊かさだと考えてきた北欧の人々の感性を感じること



ができる。北欧とはいえ、都会に出てくれば消費的な側面も目立つようになる。ファーストフードチェーンやコンビニも目に付く。それでも、人々がサステナブルな社会の構築を目指し、環境問題にも高い関心を示し行動する背景には、こうした日常のちょっとした楽しみから自然と人間の関係性を感じ取っているからだと思うのはちょっと大げさだろうか。写真：Naoko Akechi Atsushi Tsuzuki 1982年生まれ。スクーリングパッドデザイン6期。学生時代は農業、環境問題、サステナビリティについて学び、環境系の調査・研究に没頭する。スクーリングパッドにて多くの刺激を受け、現在、地元愛知県での起業に向けて活動中。

What is Social Business?

text：John Moore ／ translation (English into Japanese)：長谷川守 (TOKYO DESIGN FLOW)

Business is tough today! Everyone says so... but is it? Or are we still trying to do business the old way? The old way died with the sub-prime. The old way had been dying fast for almost 10 years. But nobody wanted to let it go and change for the better... Limited liability companies were created to protect the European slave ships business taking black slaves from Africa to America and trading humans for sugar and rum. A wonderful business model that made many families very rich for centuries, but it put many social problems into the world. We now must take 100% responsibility for our business. Especially what it does to our planet. We have no choice. The old way is dead, long live the New Way of business! The new way of business does not just make money. It gives a better life for everyone. It does give money, but it also gives smiles, gives community, gives us the choice, gives us knowledge, gives us a more livable future. This is Social Business.

We need language for this in Japan. Language and stories help us to change faster and better. We are storytelling animals. Please help create Social Business language in Japanese. 12 years ago, I took over Patagonia Japan. As a Japan Team we renewed our business story. We told ourselves we were here to make a better future for our kids. We told our new story to our ourselves, our partners, our customers, our community, our friends overseas. The result is a very successful Social Business. I was the only non-Japanese on the Team. Patagonia Japan people renewed and re-told their own story and changed a good piece of the world. We need more organizations and people changing to Social Business today. Then we will make Social Business change Japan for a better future. Obama's Grandparents family maybe came on the limited liability slave ships. Today, Obama is bringing Social Business values to change America. Today, the planet does not have 100 years to change, it only has ten. We have to move fast.

今ビジネスを成功させることは難しいと多くの人が言っています。でもそれは本当でしょうか。私たちは未だに昔のやり方にしがみついているのではないでしょうか。これまでのビジネスの方法はサブプライム問題によって、その力を失いました。10年ほどのあいだに失速してしまうような古い考えは捨て、よりよい変革を求めなくてはなりません。有限責任会社はアフリカからアメリカに黒人奴隷を選び、砂糖やラム酒をつくらせるための人身売買を行うヨーロッパの奴隷船ビジネスを保護するためにつくられました。この驚くべきビジネスモデルは多くの家庭に幾代にもわたり富をもたらしますが同時に多くの社会問題を生み出しました。これからは自分たちのビジネスに100%の責任を負わなくてはなりません。特に地球環境への配慮は無視できません。古い考え方はもう通用しません、長く付き合える新しいビジネスの方法が必要なのです。新しい方法はお金だけでなく、全ての人によりよい生活と笑顔をもたらし、社会に選択、教養そしてよりよい未来を与えてくれます。これがソーシャルビジネスなのです。日本にはそのための言語が必要です。言語とストーリーは早くよりよく変革する手助けとなります。私たちは情報伝達動物です。一緒に日本語でソーシャルビジネス言語を作っていきましょう。12年前、私はパタゴニアジャパンを引き継ぎました。私たちは日本チームとしてビジネスストーリーを作り変えました。自

分たちは子供達のためのよりよい未来をつくるためにここにいるんだと、自分たちを始めパートナーや客、コミュニティや海外の友人達にも言い聞かせました。こうして私たちのソーシャルビジネスは成功したのです。私だけがチームのなかで日本人ではありませんでした。パタゴニアジャパンの人たちは自分たちのつくったストーリーを刷新し、世界の一部を変えたのです。よりよい未来の為に日本を変えるソーシャルビジネスを普及させるにはもっと組織や人材が必要です。オバマ新大統領の祖父母はおそらく有限責任奴隷船で連れて来られたのだでしょう。今、オバマ大統領はアメリカの変革のためにソーシャルビジネスの価値を見い出しました。地球は変革の時をこれから100年も待てないかもしれません。一刻も早い行動が求められています。



ジョン・ムーア has worked in digital community communications in London, New York, Singapore and Tokyo where he won the Dentsu Presidents Prize, launched mobile technologies and learning organization's like Patagonia.



● : TOKYO DESIGN FLOW paper 設置店舗

TOKYO DESIGN FLOW SUPPORTER'S NEWS

HIDEAWAY

3月26日(木・LAST THURSDAY) SHANTI タロット占い開催!

TEL:03-5410-2343 <http://www.treehouse.jp/hideaway/>

Smile Junky HB Cafe

2009年は料理三品+飲み放題の「2009円パック」をやってます!

SHOP HOURS 8:00 ~ 23:00 (フードLO 22:30, ドリンクLO 22:45) TEL : 03-5770-1450

SunshineStudio



「原宿不動産 Bar」開店 お酒をかたむけながら不動産を探せる場所。
ぜひお気軽にお越し下さい!

開催期間 : 3月3日~3月31日、毎週火・木曜日 営業時間 : 19:30 ~ 23:00 (カフェは通常通り営業)
紹介物件 : 都内賃貸物件を中心にご紹介。*内覧は別日で実施いたします。
<http://www.sunshinestudio.jp/>

Chambres D'hotels HANA

4/26 (Sun)17:00 ~24:00 「Viva La Fruits」 at Chambres D'hotels HANA

Produced by Naruse, Daisuke
DJ: Shingo*420 (Sexon Super Peace)
Maxwell (Chambres)
Lani
VIVa (Xerosen, CALIENTE)



南青山のバレアリックレストラン、シャンプルドットハナで毎月レギュラー開催されているサンデーアフタヌーンパーティ。フルーツが主役の感じたことのない世界に・・・笑顔と愛がいっぱいの空間へ・・・目で楽しみ、香りに酔いしれ、舌で味わう! エントランス料金¥1,000でフルーツ食べ放題です。

<http://www.chambres.jp>

配布店舗募集 我々の考え方に共感し、『TOKYO DESIGN FLOW paper』を応援してくださる店舗様を募集中です。興味のある方はinfo@tokyodesignflow.comまでお問い合わせください。

ネット販売 雑誌のオンライン書店「Fujisan.co.jp」にて『TOKYO DESIGN FLOW paper』をお買い求め頂けます。 <http://www.fujisan.co.jp/magazine/1281683108>

定期購読のお申し込み 現在定期購読の準備をしています。最新情報は右記サイトをご覧ください。 <http://www.tokyodesignflow.com/paper/>

TOKYO DESIGN FLOW

WE ARE LOOKING FOR...

Situationist

都市に状況を創ることに興味がある人、現代の革命家を探しています。政治や経済よりもスポーツや文化で社会に新しい状況を作ろう。

Newser, Writer, Executive Contributor, Editor.

携帯電話一つで社会を斬る新しいニュース記者を求めています。ウェブ上に投稿するNewser、読者の評価で印刷媒体 (Tokyo design Flow 等) のWriterへ、そして文章の力で人々を動かす事のできるExecutive Contributor、そしてメディアサーフの新しい情報事業の編集を進めるEditor を募集しています。

Web Creator

トウキョウのデザインの流れを伝えるメディアとしての機能を果たすTOKYO DESIGN FLOWのウェブサイトを一緒に作り上げてくれる方を募集しています。アイデアとセンスで既成概念を越えていく「Web Creator」をお待ちしています。

Movie Creator

WE-TVは「Whole Earth」の頭文字からなり、モットーである「we are the televisions.」が示すように、自ら求めるメディアの在り方を発案、制作、放送までを行う、まったく新しいインターネットTV事業です。WE-TVにて独創的なコンテンツ、新しい情報の発信者となる「Movie Creator」を募集します。

詳しくは info@tokyodesignflow.com へお問い合わせ下さい。

LAST THURSDAY 2.26 2009 REPORT

混じり合うこと。そこから生み出すこと。

text: 大隅祐輔(TOKYO DESIGN FLOW)

「Obama De Night」と題され行われた2月LAST THURSDAY@SMOKE。人気がうなぎ昇りのオバマ大統領を具体的なフューチャリングモチーフとして用いた今回の『TOKYO DESIGN FLOW paper』、そして新たなフィットネスツールとしてYAMAHAから登場した「BODiBEAT」を使用してのPedal Night Cruisingなど。このイベントも新たな試みを開始しようとしている。まず、最初はDJ教授。ジャズを中心とした選曲でお客様の入りの勢いで乱れた空気に落ち着きをもたらした。そしてシンガーMIWAのバンドで場がなごみ、再び場の空気が変化し、数名が持ち寄ったスライドショーを伴うプレゼンテーションへと移行していった。今回は5組6名のプレゼンテーションが行われた。「Farmer's Market」から始まり、果物と様々なアートを融合させたイベント「Viva La Fruits」を展開する「MEOW」、サウンドインスタレーション／子供を対象としたワークショップからファッションショーのBGMの制作まで行っている「NOiR」、新たな形態、語学トレーニングSNSウェブサイト「iKnow」、そして僕たちが今後拡大させようとしている「we-tv」のコンテンツである「OBAMA Speech Contest」。Pedal Night Cruisingには悪天候にも関わらず20名以上の参加者が募り、BURTON社のスピーカー内蔵リュックとBODiBEATによるBGMと共に都内の雑踏を駆け抜けた。コンテンツは以上のようにさまざまだった。それぞれが今まで作り上げられたLAST THURSDAYという場から、革新的なアイデアを産みだそうと試みている。次第に形態や方法が変化していくLAST THURSDAY。最後はNOiRのBlack Sabbathによるアッパーなライブでこの夜は終了した。



NEXT LAST THURSDAY >>> 3.26 2009 URBAN ART

Music Shocking!!! Vol.3

テレフォンショッキング形式で繋げる音楽の輪
DJ YONA →DJ NaI a.k.a. Radio one

DJ NaI a.k.a. Radio oneとして音楽に関するキャリアを開始したきっかけは、17才のときにターンテーブルとミキサーを購入したことが一番のきっかけです。約10年前、LONDON NIGHTの大貫憲章さんやLONDON NIGHTで回っていたDJの人たちに大きな影響を受けた、まさに当時はLONDON NIGHT KIDSでした。その当時僕自身もかけていた音楽はロックでした。時代の転換期を迎えている現在、ネットの普及で、CDが売れなくなり、配信、ダウンロードが今や普通になってきました。同時に、表現、アプローチをする場が増え、PCでの音楽制作も簡単にできるようになってきたし可能性は多分にあると思います。DJもどんどん増えてきていて、前はレコードでDJするのがほとんどでDJブースはレコードボックス山積みなんて光景でしたが、今はCD-Jの方が多くですね。時代の流れと共に、スタイルが変わってきて、前より身近に簡単に音楽が手に入ったり、聴けたりできるようになりました。こうした流れの中で、音楽シーンがもっともっと盛り上がりつつあれば、様々な場面でDJとして臨機応変な役割が果たせると思います。その中で僕が流す一音一音から、僕自身のメッセージを感じてもらえれば幸いだと思います。ちなみに毎月第三月曜日に代官山AIRでBLACKというレギュラーイベントをやっています。是非遊びにいらして下さい。



Dj NaI a.k.a. Radio one

1997年からDJを始め、数々の国内最高峰と言えるアーティストや海外アーティストと共演し、そのクオリティの高さを示してきた。音楽がメインのイベント以外に、ファッション雑誌やVICE MAGAZINEなどが主催のサブカルチャーとして発信されるイベントや、アパレルやファッション系のイベントにも多数参加。アパレルブランドに音楽提供もしており、彼の音楽性の豊かさは多岐に亘る活動からも実証されている。Break Beats, House, Techno, Electro を中心としてフロアをコントロールする「Dj NaI a.k.a. Radio one」のほか、別名義によるHip Hop setでも多くのPARTYからの出演オファーを受けている。Radio one名義でMIXCDを発売し、House, Techno, というジャンルの激しさと美しさの共存が絶妙なバランスで表現され、Rock, Drum & Bass, Disco, Hip Hop, R&B, Reggae などDance musicのありとあらゆる要素を全て網羅させた。ジャンルが過剰に細分化されているシーンの中で彼が出した答え...それは「Music is one」つまり音楽は1つであるということ。音を自由に操りそこにいる者を歓喜へと導くその姿からは、1つである音楽のほかに聴こえてくる物は何もないであろう。
TEXT: DAN <http://ameblo.jp/djnal/>



AFTER WORDS

今回のテーマは「都市の冒険」。
この『TOKYO DESIGN FLOW paper』も毎号「冒険」しています。現在、数多存在する雑誌やフリーペーパーは広告により成り立っています。それにより、記事の内容は広告主のための文章となり、単なる情報一つであることから脱却することはできません。すると本来のジャーナリズムの意味、事実をニュートラルに分析して表現して行くことはどこにもなくなってしまいます。このペーパーで最も重要視されるものは「自由」な視点。自由な好奇心、探究心を持って社会、時代をエディットしていくことはある意味、冒険です。そして、それを出版し続けていくことも冒険です。リスクがあるけど面白い。このペーパーに関わる人たちの、なんともいえない高揚感が伝われば、僕は幸せです。
『TOKYO DESIGN FLOW paper』
堀江大祐



WE ARE THE TELEVISIONS
<http://www.we-tv.tv/>



Tokyo Live TV
www.we-tv.tv/tokyo_live_tv/

Schooling-Pad  **生徒募集中!**

www.schooling-pad.jp

Answers Lee's Choice

冒険してもいい頃

text：Alexander Lee Chang

編集のマットから言われた。「LEE君、今回のテーマは“冒険”なんです。」パッと僕はトムソーヤではなく漫画「みやすのんきの冒険してもいい頃」をイメージしてしまった。ん～なんか悲しい。子供のまま大きくなってしまった、ちよいエロ大人の僕です。
ん～、冒険ね!? ちょっと前に読んだ、ファッションデザイナーの山本寛斎さんの本『熱き心』。このタイトルで完全に心をつかまれた僕は、すぐにこの本を手に入れ、いくつか良いことを再確認させてもらいました。その中の一文で「『外見こそが最も重要な自己表現だ』オシャレは自己表現でいちばん大切なこと。外見こそが最も大事な自己表現。何歳になったから何を着るなんて、誰が決めたのか?カッコいいことは全て回答無用である」。

この言葉、ここにズ～ンってきた! し

かも自分の従業員たちに「あなたたちはファッションの会社にいるんだオシャレしてこい!」、「いつも違う服を着て楽しもう!」。そして、「もし、何を着たらいいか迷ったら、合わせた事のない服同士でコーディネートしよう!」。ん～いいね!これって、完全に冒険心をくすぐるし、楽しめる。僕も結構そういうのやります。ドキドキするけどそれがまた楽しいんです!

ということで、僕は今回は長ったらしい話ではなくて、箇条書きで都市での楽しい冒険について、考えてみます。もし興味がある人がいたら、やってみて! 僕は絶対に責任とらないけどね...こんな冒険 (いたずら?) あつたらいいな!? (昔よくやったけど今あまりしていないのも含む)

・いつもと違う帰り道で帰ってみる。

・歩いて目的地まで行ってみる。
・ワザと遠回りしてみる。
・ぶらり途中下車してみる。
・チイ散歩してみる。
・歩きながらいきなり笑い出してみる。
・歩きながらいきなり怒ってみる。
・歩きながらいきなり泣きだしてみる。マジ号泣!!
・選挙に行ってみる。
・好きな人にメールではなくラブレターを書いてみる。
・嫌いなヤツにメールではなくラブレターを書いてみる。
・小学生と一緒にマジで鬼ごっこをする。
・幼稚園児とマジで砂場遊びをする。
・原宿遊歩道を目をつぶって歩いてみる。
・原宿遊歩道を耳を押さえて無音状態で歩いてみる。
・カフェに行って、「面白いことやるんで面白かったらキーキ付けてくれる?」って交渉してみる。
・竹下通りをドリブルして一人も人に当たらずゴールしたら優勝というゲームをする。
・自分のお気に入りの野菜を持って行ってレストランで「この野菜も入れて!」ってリクエストしてみる。

・マックに行って、自分でニコツとして¥0もらう。
・1週間携帯電話の電源をOFFにして友達との連絡を家電のみにする。
・1週間会話は全てチャットだけにする。

考えだして、箇条書きにしてみるというい出ますね! まだまだ行けますが、この辺で今回は終了。とにかく、冒険ってイコール、「挑戦＝発見＝発展」って感じで感動する簡単な方法でもなさそうな気がします。感動っていいじゃん!

次に、こんな冒険 (遊び)もしてみて、あなたの冒険野郎度チェック (個人的な見解なので自分で感じてください) それでは問題です。(大人になってからのことです)

- 1、よく寄り道をする。
- 2、街で気になった人がいたらナンパする。
- 3、レストラン、カフェで自分のリクエスト (何々多めでとか) をする。
- 4、小学生と本気で話をするコトがある。
- 5、いつも左分けなのに右分けににするコトがある。
- 6、ピンポンダッシュをするコトがある。
- 7、ラブレターを書くコトがある。

8、街で、ワザと大笑い、大怒り、大泣きをするコトがある。
9、10年以上凝っている事がある。
10、冒険物の本、映画、話が好きですぐに影響され行動してしまう。

チェック1個＝冒険野郎度10%です。なのでチェックが9個ある人は、な、なんと冒険野郎度90%です! そんなあなたは、自分自身で質問を作って冒険野郎度指数300%を目指して冒険してください! 楽しみましたか? それではまた、次回宜しくです!



アレクサンダー・リー・チャン
1975年サンフランシスコ生まれ。アパレルデザイナー／プロスケーター／アーティスト。幼少期のカリフォルニアにてスケボーと出会う。10代の頃からプロスケーターとして活躍。96年より7年の間、アパレルブランドのディレクターを経て、03年独立し[Chang Co. Ltd.]を設立。04年S/Sよりスタートした[AlexanderLeeChang]ではアーティストとしても活動する彼のDIY精神で凝ったディテールと構造的なフォルムのプロダクトを生み出している。立体作品、コンピューターグラフィックなどが得意。

一人の作家 一つの現象 One Artist - One Phenomenon vol.3

佐藤誠高による芸術上の移植技法

text: Rodion Trofimchenko

佐藤誠高は対極を縫い合わせながら、絵画の領域で合成の遊具を創造する。勤勉な鉛筆で描かれた彼の作品は、「自然的なものと人工的なもの」、「男性と女性」、「現実と架空」、「有機体と無生物」、そして「写真性と絵画性」、「絵画性とドロ잉」の混合物である。佐藤は多数の強迫的な「移植手続き」を行い、総合的な構成物を生み出す。この幾つかの「移植手続き」を説明しよう。

第一番目の移植手続き:
「赤ん坊性」を「縫い包み」へ

佐藤は赤ん坊を研究している。つまり赤ん坊の身体の形、彼らのポーズと振る舞いを監察する。特に大変柔らかない、かつ虚弱なポリウムに興味があり、彼らの打ち解けた呑気な動きと自由で軽率な行動に魅了されている。それは、赤ん坊の邪気や不器用や率直が縫い包みのイメージ、たとえば合皮のラビットに移植されている。こ

れは生き生きとした子供のポーズをとった製造された物になる。製品の中で赤ん坊の性質が見える。このミュータントは不気味である。

第二番目の移植手続き:
「公式的なフォト・ショットのためのポーズ」を「赤ん坊の身体」へ

生き物の中から見える人工性は、子供の厳しい正面の構成を持つ描き方によって強調されている。赤ん坊にはありえないパスポート用のような写真で見られるポジション、観客に不安を与える直接の眼差しを生み出し、この「縫い包み赤ん坊」の年齢と意図を不明瞭にする。このアマルガムは心をかき乱す。

第三番目の移植手続き:
「建築学術の順序」を「どさくさ」へ

佐藤は、混乱や乱雑やカオスの明示で

ある髪の毛をロボットのような精密さをもつ鉛筆で描く。それは、ヘア・ドレスではない。それは、幾何学上の平面や直線や正確なカットから作られた「ヘア・建築」である。この髪の毛は生える何かのものに見えない。このハイブリッドは上品である。

第四番目の移植手続き:
「写真の記録的なスタイル」を「想像上のイメージ」へ

佐藤の鉛筆製の絵は写真のように見える。しかし、表現されているイメージは明確に虚構的である。それによって、イメージは「真実である」と説得しながら、「空想的である」と確信させる。矛盾ですが、この作品は「ファンタジーのドキュメント」、「厳格の記録」、「仮説の事実」である。この、複合物は比喩的である。

第五番目の移植手続き:
「鉛筆の技術」を「絵画の次元」へ

佐藤の良心的な鉛筆は、針のように白いパネルに明確な線から構成されたイメージをひっかいて描く。彼の鉛筆はコンピュータのプログラムに組めるレーザーのようなものである。つまり、同一の隙間を残し、絶対的な対称性に従い、完全な輪郭線を守る。佐藤の鉛筆の「サイバー」カリスマがあるにしても、出来上がった絵の身体は生き生きしている。裸の女性の敏感な腹は、観客に手触りの意図を引き起こす。赤ん坊/縫い包みのスキンにある縫い目は、肉体的に見え、ぬれているように表現されている。このように、佐藤の鉛筆の繰り返す線は、絵画的な視覚へ導く。彼の合成遊具は複合的で、凝縮され、絵画的に豊かなものである。



Portrait of Woman, 7 2 7x6 0 6, pencil/charcoal/ acryl on panel/paper, 2008



ロディオン・トロフィムチェンコ
サンクト・ペテルブルグの工学経済大学と東欧精神分析専門学校を卒業。日本の流通経済大学で「日本広告の心理的な特徴」の研究に従事。武蔵野美術大学にて修士号取得。現在、博士課程で精神分析と芸術における視覚をめぐる問題の研究を続けながら、キュレーション／批評活動を行う。

チャリのフロウ 第5回

電動自転車のフロウを追う

text: 清田直博 (Media Surf Communications inc.)

自転車の流れを追うチャリのフロウ。今回は街で最近増えているもう一つのチャリンコ、電動自転車の流れを調査してきました。若者達を中心にビストやロードレーサーなど、走る楽しさを追求するスポーツ車が盛り上がっていますが、それとはまったく違うベクトルで、世のおばさま方やママさんたちに支持を集めているのが、ひたすら実用性を追求した結果生まれたママチャリの進化形、電動自転車。いま日本で走っている電動自転車は正確に言うと「電動アシスト自転車」。あくまでも人間がペダルを踏む力を軽くしてあげるためにモーターが動きます。一方、ペダルを踏まなくてもバイクと同じようにアクセルを入れると走り出す電動自転車は「フル電動自転車」と呼ばれます。

このフル電動自転車、いま自転車王国の中国で猛烈な勢いで広まっているそうです。2007年11月のWIERD NEWS

の記事によると、上海で100万台、北京で75万台のフル電動自転車が走っているとのこと。中国では1万円台から入手可能。そんな中国製のフル電動自転車ですが日本の法律では原動機付自転車の区分に入るため、普通の自転車と同じように公道を走ると取り締まりの対象になるので注意。ネットでも売られてるから簡単に手に入りますが、リスク覚悟で乗って下さい・・・

一方、日本では電動アシスト自転車の売上が伸びており、去年ついにスクーターの出荷台数を初めて超えたと話題に。ちなみに去年の電動アシスト自転車の出荷台数は約30万台、スクーターの出荷台数は約29万台。スクーターが「排ガス規制の強化や昨年末の原油高の影響で激減する一方、電動アシスト自転車は道路交通法の改正でパワーアップが認められ、人間がペダルを踏む力の2

倍 (人力:動力=1:2) までアシストできるようになり、メーカー各社が続々と新製品を投入中です。

しかし、電動アシスト自転車の値段はだいたい10万円を超えるし、カッコイイと思える商品もまだそこまで見つからない。ならばいっそのこと、いま自分が使っている自転車を電動アシスト化できたらいいのになあ、そんなことを考えていると、電動アシスト車いすを開発している方から偶然連絡が。車輪の内部にモーターが仕込まれたユニットを自転車用に応用できるかもしれませんとの話。これだとタイヤを付け替えるだけで電動アシスト自転車に改造できる。そこで急遽、相模原にある職業能力開発総合大学校の知的電子制御システム研究室におじゃまして、電動アシスト車いすの製品化を進めている高橋久准教授と物流器械の製造から介護施設の運営まで手がける株式会社ミヨシ・ロジスティクスの吉田潔社長にお会いしてきました。

お二人が開発している電動アシストシステムの特徴は、加速度センサーで人が加えた力を検出してモータを制御しているところ。いままでの車いすや自転車であれば見られた急発進や突っかった



感じが無く、とても滑らかに車輪が動き出します。私も車いすに試乗してみました。が、車いす自体が軽くなったような感覚。座ったまま手を引いてもらっても軽々と動きます。これが自転車に付いたらすごいだろうなあ。

以前本誌で紹介した、ヨーロッパでよく走っているガゴ付きのゴツい実用車なんかは、坂道の多い東京で走るには使い物にならないけれど、電動アシスト機能がつけばその問題も解決しそう。さっそく一台プロトタイプを作りましょうかと意気投合。働く自転車がもっと増えると街の景色や人々の働き方も変わってくるに違いない。急発進した本プロジェクト、追って経過を報告していきます。興味のある方はぜひご連絡下さい!



電動アシスト車いす、仲のよいお二人。左が吉田社長、右が高橋教授。

★イベント告知
前回のチャリのフロウで紹介した「ギヤルチャリ」ですが、その作者もお招きしてこんなワークショップを開催します!
タイトル:「緑の中で自転車に絵を描こう」
期日: 2008年4月29日(水・祝) 田みどりの日
場所:「IID GREEN DAY」会場@世田谷ものづくり学校
詳しくはコチラへ
http://www.r-school.net/ (IID 世田谷ものづくり学校)

OUTTANET RADIO interview

インターネットを通してホットなラジオを生で提供している「OUTTANET RADIO」。
彼らの活動を解明すべく、インタビューを敢行した!

text & interview: TOKYO DESIGN FLOW

TOKYO DESIGN FLOW (以下、TDF):
OUTTANETの簡単な説明をおねがいします。
ZEN-LA-ROCK (以下、Z)
『Thinking Out of The Box』がコンセプト。
(http://outtanet.blogspot.com/)
TARO(ARTICALIZM、以下、T):小学生の頃の気持ちにレイドバックできる場所。
AFRA (以下、A):東京に住む20? 30歳ぐらいの兄ちゃんたちが好きな音楽かけたりたり適当なことを話したりする生ラジオ。
TDF:運営しているメンバーの紹介をおねがいします。
AFRA,ZEN-LA-ROCK, SKYFISH, SPEX SAVERS, DONSTA, ARTICALIZMです。ロボ宙顧問とイヌミカクにもよく参加してもらってます。
TDF:実際にすでに放送がはじまっていますか?様子はどうなかんじですか?
Z:STUDIO内は非常にイイ雰囲気です。
T:これからな感じです。
DONSTA (以下、D):はじめパタパタ、なかなか和気アイアイ。
A:タバコがけむい。
SKYFISH (以下、S):定期的にお花見やっような感じ。
TDF:ハプニングとかはありますか?特に面白かったことは何かありますか?
Z:まず前は音が止まったね(笑)。
D:生なんでノリで言っちゃマズいことも言っ

ちゃう。
A:3時間前に集合して、本番おもいっきり音が出ーへんかったのはギャグやった。めっちゃ焦ったけど。
S:イヌミカクが脱いで踊っていたのでよく見ると、乳首に煎餅が付いてたこと。
TDF:WEBでこういう発信の仕方をしていて今後にやっていきたいことありますか?
Z:ホントのFMでON AIR。
T:WEBから飛び出したところでの遊び場の構築。温泉生ラヂオ旅行。
A:面白いのに日の目をあびない音楽や人にスポットを当てたい。
TDF:音楽に携わる人のWEBの使い方などでなにか注目していたりなにか考えていることありますか?別のサイトでこういう使い方はいい!とかこれに注目している!とかあれば是非。
D:YouTubeチャンネルだけで、50CentMusic (http://www.youtube.com/user/50CentMusic)、SATURDAY CARTOONS、Pimpin' Curly はオモシロい、やりすぎ感がイイ
A:太郎くんから教えてもらったオルタナティブ通信。情報の裏の情報が読めるサイト。きわどい!
S:MC般若のブログ(毎回フリースタイルを録音してアップしている)。

TDF:生放送でやる意味をご説明ください。
Z:何が起こるか分からないコ
T:現場感、緊張感、リアルタイムでの視聴者とのやりとりを大切にしたいから。
D:ダイレクトに対応できる、時間を共有できる
A:録画の試合よりやっぱり生ですよね!
S:リスナーの感想や意見がすぐに分かるし、何より時間を共有している感じが楽しいです。ポッドキャストのラジオを提供しても、パーティとは違った楽しみ方になっちゃうと思うけど、生放送だとパーティに近いなっています。
TDF:今後の予定をおねがいします
Z:まず4月3日(金)@BX CAFEにてLAUNCH PARTYをします。
コナラも勿論生で。次回放送日はhttp://www.outtanet.com/をCHECKしてほしいです。
T:getting busy, making money。
D:ステッカー、BX つしよ。
A:ラジオのスタジオが高いんで稼きたいです。それは俺の希望か。
S:5/20にPOPGROUPから1stアルバム「RAW PRICE MUSIC」発売します。
TDF:4月のSTYLICONでのパーティーの件をご説明ください。
Z:RADIOのノリを伝えたいかな。と。
A:渋谷ハレームの階上ということで無条件

にテンション高めです。
TDF:最後にTOKYO DESIGN FLOWというのは、東京という街を盛り上げる、そして情報化していく、という目的でおこなっているのですが、現在の東京をどう思いますか?
T:細分化されすぎていてジャンル分けが激しく閉塞感がある。もう少しMIXしていかなければ面白いものが生まれなさそうな気がします。
D:ゴチャゴチャしすぎ、だけど好きですワタシハトキオスキ?
S:どうも思わないけど地方や外国から帰って来ると渋谷の人ごみが落ち着くのが不思議。
Z:モロモロで!
A:モロモロって何やねん! ありあまる情報より、ありあまる若人のパワーでもっと明るくて元氣な街になるべきだと思う。

OUTTANET RADIO
AFRA,ZEN-LA-ROCK,SKYFISH,SPEX SAVERS,DONSTA,ARTICALIZMといったレギュラーメンバーで構成される新感覚RADIOプログラム「OUTTANET」は2008年末から実験的に数回の放送に成功。2009年2月から本格に開局&始動開始。「Thinking Out of The Box」をコンセプトに掲げ、その言葉通り人種も国もジャンルも固定概念の枠という枠をも軽々越えてしまうプログラムを目指している。当然、生で放送。放送日には様々な新旧織り交ぜのGOOD MUZIKが必ずCHECKでき、リアルタイムでのメッセージの書き込みも可能。以下のサイトにアクセスするだけで自動でC/H/E/C/K出来ます。

www.outtanet.com



APR.3 FRI 2009
STYLICON
OUTTANET RADIO
LAUNCH PARTY!
@BXCafe
HOST MC:ZEN-LA-ROCK
FEATURED VISUAL: CZAR
DJ: AFRA ロボ宙 Skyfish SPEXSAVERS
THREEPEE BOYS(DONSTA/Y.O.K.O./YOIHEY) イヌミカク
more info:www.myspace.com/stylicon

WHAT'S STYLICON?

渋谷の老舗クラブHARLEMのラウンジ“BX CAFE”にて毎月第一金曜に展開されている、ジャンルレスでMASHUPな人間が交流するパーティー“STYLICON”(スタイリコン)。カテゴライズされない人達との楽しいコミュニケーションと良い音楽やデザイン/ビジュアリストを紹介していく場として開催中!中国語ベースのWEBマガジン(CHOPSTICKS MAGAZINE™)とも連動してアジアのARTやクリエイティブも面白く発信していきます。

CHOPSTICKS MAGAZINE™
www.chopsticksmag.com
(今回のインタビューの中国語版も掲載中!)

ニートの君に、贈る言葉

映画『今、僕は』監督 竹馬靖具インタビュー

interview&text: 清田直博(Media Surf Communications Inc.)



ニート(NEET)とは、直訳すると「就業、就学、職業訓練のいずれもしていない人」のことだが、映画製作の教育も現場経験もない、言わば“映画ニート”の若者が、

映画への情熱と努力、そして同志数人の協力により、今後の日本映画史に残るかもしれない一本の映画を作り上げた。
その映画のタイトルは『今、僕は』。引きこもりの青年の内面を静かに深く描き、去年ヨーロッパ各地の映画祭で絶賛を浴びた。現在は渋谷のミニシアター UPLINK Xにて、自主制作映画としては異例のロングラン上映中。この映画を撮ったのは一体どんな若者なのか? 監督・脚本・編集・主演の4役をこなした竹馬靖具さんに実際に会ってお話をうかがってきた。いま世間から(あくまでも体制側からのレッテルであるが)ニートと呼ばれている若者達に竹馬さんの言葉と情熱を少しでも伝えられればと思う。

—やりたいことをやっちゃう

自分の友達でもやりたいけどできないという人がいっぱいいて。たぶん怖いんでしょね。いろんな怖さがあると思うんですけど、結局はどれだけそれをやりたいかということだと思うんです。僕の場合はそれしかないっていうこともあるんですけど。高

卒でもあるし、社会的に仕事を選びにくい。大学浪人して半年でやめて、社会に出るとどうなるのかっていうのを知ってみたかった。結局社会に出てみてダメだったですけどね。バイトを点々として、おれはダメなんだと。日本社会では普通に生きていけないんだと気付いて。
自分の場合はプレッシャーがすごくあったんですね。見えないリミットがあるわけじゃないですか、いつ死ぬか分からないという。なのに自分はなにもできてない。ただ生まれて死んで行くだけじゃいやだなと。なんか意味があるんじゃないかと、希望が。生きてるということを感じたかった、感動したり楽しんだり悲しんだり。自分が好きなことだったらがんばれるなと思って、だったらやっちゃおうと。
そこで映画が好きだったので俳優を始めたんです。あまり考えずに、映画といったら俳優だろうと。そして俳優をやっていくなかで、業界のことや日本映画のことがある程度見えてきて、とんでもないと思ったんですよ。そういう不満が出てきて。あるときガルデンヌ兄弟の「ある子供」という映画を見て、なんか原点に帰ったんですね。

おれってこういう映画に出たいんだと。でも日本じゃできないから、自分で作ろうと。役者経験しかなかったのていろいろ考えたんですけど。映画学校に行くとか、助監督に付くという選択肢もあったんですが、実際に自分でつくるのが一番の勉強だと思って。それで作り始めたんです。
映画を撮ってる時はすごく楽しかったですね。自分のイメージ通りだったり、イメージ以上のものになったり。そしてそれをスタッフで共有できるところが。リスクと責任を負うことにプレッシャーはありました。自分が発起人でもあるし責任者でもあるので、自分がやめたら終わっちゃう。たけどこの映画を撮って趣味的に終わるといのは嫌だったんですよ。協力してくれる人には何らかの見返りをしないといけないというのがあって。それは映画祭で上映されるということ、公開するということで恩返しできるんじゃないかと思うんです。

(続きはTOKYO DESIGN FLOW ウェブサイトで掲載予定)

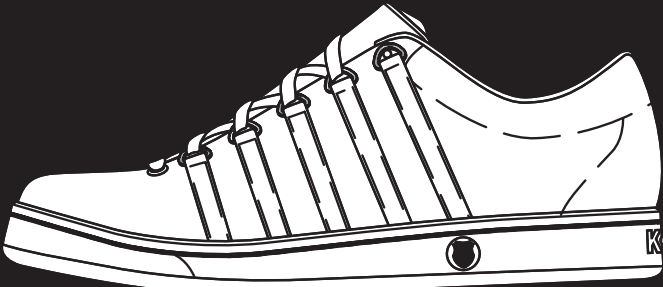


Yasutomo Chikuma
映画監督・23歳のとき(2007年)、初監督作品「今、僕は」を発表。今後の活躍が注目される期待の新鋭。

『今、僕は』
(2007年/87分/DV/カラー/日本)
渋谷UPLINK Xにて3月27日まで1日2回上映(17:00/20:45)。
4月上旬まで17:00の回のみロングラン上映決定。
監督・脚本・編集:竹馬靖具
撮影・編集:宗田英立大
出演:竹馬靖具、藤澤はる、弁、志賀正人
公式HP
http://www.ima-bokuwa.com/



K・SWISS FLAGSHIP SHOP HARAJUKUは2009年4月より3周年を迎えます。
新製品も続々入荷中です。ぜひ、足を運んでください!



www.k-swiss.jp

	Omotesando Hills Koban	Cat St.
		Meiji St.
Takeshita St.	Laforet Harajuku	TOKYO METRO Meiji Jingumae
	JR Harajuku	Shibuya

K・SWISS FLAGSHIP SHOP HARAJUKU
3-18-23 Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo 150-0001
TEL 03-5775-7908





不況ってなに? 正規採用って?
こんな時代だからこそ、「そんな関係ないでしょ!」ってことで、
時代の荒波、不況のハリケーンすら、ロックにいいとも軽々乗りこなし、
都市を冒険の舞台として遊び尽くすアーティストたちによる
Recession Urban Art Night
「SOWHAT...LAST THURSDAY」。
冒険の先にある、東京の未来を紡ぎ出す。

Urban Art
不況? So what...
3.26 2009
MONTHLY EVENT 
LAST THURSDAY
ART, FASHION, FOOD, TRAVEL, SPORTS, MUSIC and DESIGN.
www.tokyodesignflow.com